
絆 2 ~ 因縁編 ~

佳生

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絆2 ～因縁編～

【Nコード】

N6190B

【作者名】

佳生

【あらすじ】

僕らの始まりは、始まりの始まりでしかなかった。僕らの終わりは、始まりの終わりでしかなかった。僕は終わった。けれど、まだ……

始めに…（前書き）

この話は、基本、暗い話です。流血ざたです。苦手な方はご注意ください。
関係ないようで“絆”の一世代前の話となっております。

始めに…

これはとある高校のとある部活動が、今、廃部になり、その部室を寂しく閉鎖している原因になった物語を記したものである。

愛の物語であり、高校生活の思い出でもあり、そして狂気と恐怖、呪いと策謀の物語。

各言つ私も、それに呑み込まれている。

無事で済まそう等とは思っていない。

私も、罪を背負っているに違いない。

そう、関わってしまった私も、もう死ぬしかないのだから。

だからと言ってはなんだが、ここで軽く、登場人物を紹介しておくことにしよう。

まず始めに、我が部のマドンナ的存在である

環四賀 わしが なめこ 那由子

とても素直な良い子で、私は好きだった。

次にあがるのは

仁井 にい
歌江 うたえ

どこにでも居そうな気弱な女の子だと記憶している。

そして

間花 まはな
阿莉奈 ありな

私は余りの好ましくない子だった。

騒がしい子は、好みではない。

ここから漸く男子が参入だ。

百合荻 ゆりおぎ
誇彦 こひこ

何を考えているのかよく分からない、スーパーボーイ。

それから、マドンナと恋仲にある

水無瀬 みなせ
徹 とあ

親切優しいを人間にしたような男で誰にでも好かれるタイプの人間だ。

そして私、

つぎは
継刃 定 さだめ

と来る。

事の始まりは……本当の始まりはそもそも我々がであってしまった
事からであろうが、そこから話しても仕方があるまい。

そう、始まりは、我々でやっこの部を立ち上げた、一年生の夏、
近くの湖に合宿がてらに行ったことが始まりだった。

一・水辺の事件

じりじりと熱い訳ではない夏。

長袖を着ていてちょうど良い位の涼しさを感じさせる湖の畔で、数人の男女が、呆然と、その湖を眺めていた。

茶髪にパーマの女、阿莉奈が、感嘆の溜め息をもらした。

「ちょっと、何これ……チヨー綺麗」

彼女の言う通り、その湖は、青く透き通り、周りの木々とのコントラストも美しかった。

「…ここを教えてくれた片岡先輩に感謝ですね」

弱々しく笑い、阿莉奈を見上げたのは歌江だ。

仲がいいのか悪いのかよく分からない二人は、湖の様に感動している。

それよりも更に向こうの栈橋から、湖のそこを覗きこんでいるのは、合宿所に一番先に荷物を置いてきた誇彦だった。

何が面白いのか、杭入るように湖の底を凝視している。

「何見てるの？」

その誇彦に、合宿所から出てきた那由子が声をかけた。

声をかけられた誇彦は、一回だけ那由子を振り返り、また湖に視線を戻す。

「湖の底を見てる」

「何で？」

「……底に何もない」

「だね」

「木の葉も、木の枝もない。おかしい……と思う」

「そう？」

「……」

言われて、誇彦は言い返さなかった。

また黙って湖の底を見る。

「おゝい！ 部屋割り決めるって！」

全員が荷物を運び終わったのだろつ。

合宿所の玄関口から、よく通る明るい声で徹が外に出ている全員を呼ぶ。

「今行くよゝっ！！」

そう言い返し、那由子は大きく手をふった。

籤引きで決めた部屋割りには、以下の通りだった。

「神様は中々粋なことをするじゃないか」

今しがた自分がまとめた表をみて笑った定は、それを他五名の前に出す。

「……絶対おかしいだろ、これ」

呟いた徹は赤面している。

「あ、俺が、ロビーで寝るから」

「ええっ!! 一緒の部屋くらいで何よ」

更に顔を赤くしながら言う徹に、同じ部屋に当たった那由子が平然と言う。

二人の間で、明らかに価値観が擦れ違っていた。

「そつだよ、徹。同じベッドで寝る訳じゃあるましい……なあ、誇彦」

「そつだな」

くすくすと笑う定は、同じ部屋の誇彦に話をふった。

彼は相変わらず、本当にそう思っているのか分からないような表情で適当に返す。

この決定に不服そうな阿莉奈は、頬を膨らませ、腕を組む。

「最初から、一組そうなるから期待してたのに！ マジがっかり！」

本気で怒っているらしい阿莉奈に、同室の歌江が苦笑しながらなだめる。

「まあまあ、物事はなるようにしかならないんだ。さて……夕食当番は誰だったつけ？」

小学校の炊事遠足のように、まるで親かのように微笑んだ定に言われ手を上げたのは三人だった。

那由子と歌江と誇彦。

取り合えず、料理が得意とされているメンバーなので、味の保証はできる。

もし出来なかったとしても、一泊なので耐えることは出来ただろう。

「よし。なら夕食の準備開始だ。私は風呂掃除をしているから……徹と阿莉奈は適当に暇潰ししてるといい」

「……手伝わなくていいのか？」

「そう広くないしな。大丈夫」

気遣う徹に、腕捲りをしながら定は笑って呟いた。

「今夜のデートスポットでも探すといい」

その瞬間、ぼつと徹の顔が赤くなった。

「あ、な……な、あのなあ、定……！」

「照れるな。私は応援しているから……ははっ」

「笑うなっ」

純情な奴だな、なんて思いながら、定は風呂掃除に向かった。

様々言いつつも、徹は景色の綺麗な場所を探していた。

ただ綺麗なだけではいけない。

夜に映える様な場所なくては。

「だったら湖だけで十分か」

なんて妥協もいいところな事を考えながら、それでも徹は湖の回りをさくさく歩く。

と。

「きゃっ！！」

後ろで声がした。

振り替えると、足を滑らせた阿莉奈の姿が。

「間花さんっ！？」

踏みとどまれずに湖に落ちそうになった彼女を、徹は手を伸ばして引き寄せる。

見た目より、想像していたよりも強い力で引っ張られた阿莉奈は、思わず徹に倒れかかってしまった。

しっかりと受け止め、徹は直ぐに手を離す。

「あ、ご…ごめん」

「べ、別に……大丈夫」

しどろもどろになる徹に、阿莉奈は好こしばかり上目使いで彼の顔を見る。

少し赤い徹の顔。

けれど那由子の時とは、全く比べ物にならない。

「あ、あのさ、水無瀬君」

「ん？」

視線を泳がせていた徹は、阿莉奈の呼び掛けに、彼女の顔に焦点を合わせる。

それに少しドキリとしながら、阿莉奈はもじもじとした。

そして結局

「何でもない」

言わないで、終わってしまった。

いくら強気な彼女でも、恋人のいる好きな人に、告白なんかは出来ないから……

それぞれ、一日目に担当していた当番を終え、予想以上に美味しかった夕食を取りおえた後だった。

先に浴場は、小さいまでも一応二つに分かれている。と言っても、それを分けているのは壁等ではなく、低いついたてだ。

入り口も脱衣所も同じであるのに疑問の残る場所だが、そこは古い合宿所。

昔の人々の考えがあつたのだろう。

「じゃ、先に入るね」

「はい」

入浴の準備をしてロビーを通りすぎて行く那由子らに、同じくロビーでトランプに興じていた定がヒラヒラと手をふる。

「覗いたりなんかしたら、ひどいんだからっ！」

と、嘘ぶいた那由子に、赤面した徹が両手と首をブンブンとふる。

その必死さに、那由子のみならず、歌江も口許に手を当て、小さく笑った。

「徹君はそんな事しないって分かってるよ！」

「あ……や、うん」

満面の笑みで言われて、徹は何とか笑って返した。

そして、彼女等が去った後。

「君は本当に馬鹿正直だよねえ」

「う……」

ペラペラと積み上がったトランプを捲り、定は徹を笑う。

この場には、徹と誇彦が居ると言うのに、定が興じているのはソリティアだ。

複数でやる遊びではない。

「そこが君の良いところだと思うけど……その正直さはいつか要らない誤解を招くよ」

「うん……いや、別にいいよ。正直にした結果の誤解なら」

「……いいのか。誤解は誤解だ」

「嘘の誤解よりはっていう意味だよ」

清々しいほどの笑顔を浮かべ、徹は確信的に言う。

「正直を貫き通せば、誤解は解けると思っんだ」

それは、真実。

「……徹がそう言うなら、そうなんだろうと、思う」

「今は真理だ……結構鋭いこと言うね」

「そ、そう？」

自らの言った事の重大さに気が付いていないのか、徹は苦笑しただけだった。

それから、定の興じるソリティアを何回眺めただろう。

思うより長くかかった入浴を終えた那由子らが、談笑しながら歩いてきた。

「思ったより綺麗だったよ」

「なにせ掃除をしたのは私ですから」

髪を拭きながら笑った阿莉奈に、徹が声をかける。

本当は那由子に用事だったのだが、彼女は歌江と行ってしまった。

「えっと、那由子に、棧橋で待っててって伝えてくれないかな」

苦笑しながら言う徹に、阿莉奈は一瞬だけ表情を固め、直ぐに笑った。

「うん、分かった」

ありがとう、と徹に言われて、阿莉奈は笑顔のまま那由子らを追って歩いて行く。

その後ろ姿を見送りながら、定は言った。

「純粹とは、時に残酷だな」

「？」

意味を理解せず、徹は笑顔を浮かべるだけ。

誇彦に至っては、既に浴場に向かって行ってしまった後だった。

そして、入れ違いに歌江がロビーのソファに腰かけ、文庫本を開く。

そんな彼女に手をふり、那由子と阿莉奈は外に出た。

風が涼しい。

「でさ、ぶつちゃ聞くんだけど、那由子って水無瀬君のどこが好きな訳？」

その口調は、人の恋路に興味を示す女子高生そのもの。

くふふ、と聞こえてきそうな口許に、それっぽそうに手をそえる。

まるで中年のおばちゃんだ。

「えっとね……」

阿莉奈の問いに小さく笑いながら、那由子は考える。

「私は、徹君の優しいところが好き！」

太陽が沈んだ静かな水辺に、明るい声が木霊す。

「親切なところも、相手を考えるとところも、笑う顔も泣く顔も、歩いてても走ってても、呼吸をしてるだけでも好きだよっ！」

腰の後ろで手を組み、ゆっくりと歩く那由子は満面の笑みだった。

しかし、対する阿莉奈は無表情。

口許にだけ笑みを浮かべ、阿莉奈は言った。

「……向こう側、行ってみない？」

それは昼間、阿莉奈が徹を追い掛けた、例の道だった。

寝るための準備に、合宿所内を歌江と共に往復していた定は、布団運びを始めるその前から、遠い棧橋に佇む徹を見ていた。

那由子との待ち合わせだろうと思いつつも、中々現れない彼女を待つ間の暇潰しとして、定は栈橋に向かう。

自分と並んで歌江も外にでる。

歌江は栈橋に上がる事なく、湖の波打ち際で、少し離れた場所にいる誇彦と同じように湖の中を観察しはじめた。

「那由子ちゃん待ってるの？」

聞くと、徹は素直に頷いた。

辺りは暗く、星が見えている。

「絶景かな絶景かな……空の星が湖を照らしている様だね。湖が輝いているように見えるよ」

「うん……那由子、遅いなあ」

「……君、私の話を聞いているようで、聞いていないだろう？」

「うん……あ、いやっ！ 聞いてるよ！」

「聞いてなかったよ……今」

那由子を心配する徹を微笑ましく思いながら、少し寂しい感じのす

る定だった。

かと言って、不安そうな彼を置いて去るのは心が痛む。

サクサクと、湖の縁を向こうの森側に歩く誇彦の姿を目で追いながら、定は話題を探す。

しかし、それは一瞬の内に不要なものとなった。

「きゃあぁっ!？」

「那由子っ!？」

突如として上がった悲鳴と、水しぶきの音。

悲鳴是那由子のもので、水しぶきが上がったのは、ほど近い森側の方角だった。

「那由子!!!」

叫んだ徹は、湖に飛込もうと棧橋の先端に走ろうとした。

しかしそれは慌てた歌江によって止められる。

「水無瀬さんっ! 落ち着いてください! ここから行っても暗く

て水無瀬さんが溺れちゃいます！」

腕をつかんで引き留めた歌江は、冷静に現状を伝える。

それでも振り払おうとする徹に、歌江は指をさした。

「ほら誇彦君が行きましたから。水無瀬さん、落ち着いてください！」

常の怠情的な動きに似合わず、魚を思わせる早さで、そこまで泳ぎつき、潜った誇彦。

しかし彼は、ある予測を立てて行動していた。

それが本当であつたらば、那由子は助けられない。

「……」

既に意識を失っている那由子を追い掛け、彼女の右の手を掴んだ次の瞬間。

「……っ!？」

物凄い力で、那由子もろとも誇彦は水中で引っ張られた。

しかし、那由子や誇彦を直接掴んで引っ張っているものはない。

ここには、魚もいなければ、巨大生物だって住んでは居ないのだ。

だが、どんどん引っ張られていく誇彦は、その先で予測通りの結果に瞳を見開き、息をのんだ。

目前に迫っているのは、この湖の底に一度沈んだであろう朽ち果てかけている木々達の腕。

ここに来た瞬間から、来る前に湖が地下からの大量の湧き水で循環していると調べた時からそう考えていた。

自分がぶつかろうとしている、枝と言う鋭利な凶器は、台所で言うところの、排水口を塞ぐ詰まりものの様なもの。

目が荒いので、水を塞き止めることは叶わない。

ここは、湧き水として大量に出る水を、また地下の層に流し込んでいる場所。

それにより、湖の下層では、水流の急激な変化が起きてしまっていたのだ。

そして誇彦と那由子はそれに巻き込まれた。

そして……

一瞬で赤い水が広がり、また一瞬で、地下に流された。

陸地では、徹と定。歌江と阿莉奈が、誇彦と那由子を待っていた。

時間が以上に長く感じる。

一分間の間に、何度も腕時計を確認する徹は落ち着かない。

嫌、それは全員に言えることだ。

ただ一人、定だけは、だまって湖に目を凝らす。

そして、その異変にいち早く気が付いた。

水が赤い。

じんわりと、赤くなり、そこから誇彦が顔を出した。

ザブザブと上がる彼は、右の腕を真つ赤に染めあげ、その手に、手を握っている。

だが、その図は明らかにおかしい。そして有り得ない。

「……」

呆然と湖に足を踏み入れ、誇彦の前にたどり着いた徹に差し出されたのは、たった一本の腕をだけ。

那由子を作っていたパーツの一つだけだ。

「……や、いや！」

文字通り、血の滴る惨状に、歌江は逃げるように合宿所に走り、阿莉奈はその場に尻餅をつき、絶句した。

定は、その全てを冷静に受け止めている。いや、受け流しているのかもしれない。

「那由子……」

受け取った腕の一本を抱え、徹は誇彦の横を抜け、湖に潜ろうとする。

「やめろ。危ない」

端的に言って、右の手で徹を捕えた誇彦は、ジッと徹を見る。

ジッとだ。

傷付いた腕から血が滴り続けているにも関わらず、湖に消えようとしている徹を見つめる。

すると、彼は前に進もうと言う力を失い、そこに膝をつく。胸辺りまで水につかりながら、徹は泣いていた。

腕一本の那由子。

その手の甲を額に押し付け、小さく小さく、泣いていた。

湖でうなだれる徹の前に、誇彦は何かを言いたげな、いつもはない表情を出す。

切ないと言うよりかは、すまなそうな表情。

しかし、その顔色は些かどころか大変に悪い。

ぽたぽたと滴っては赤く滲む湖に、別の赤が映る。

遅れて流れ込んだサイレンの音に、定ははっとした。

気が抜けたのか、誇彦の体がゆっくりと傾いで、湖の中に倒れこんだ。

「誇彦っ！！」

慌てて誇彦を陸に運んだ定は、次いで徹も岸に移動させる。

腕を抱いたままの徹は、瞬きすらせずに、ジッと湖面を見て、救急や警察の人間が来ても、何も行動を起こさない。

救急車に乗る際も、しっかりと腕と手を繋ぎ、離そうとはしなかった……

そしてその数日後、ひっそりと行われた那由子の葬式を境に、徹が彼女の事を口にする事はなかった。

まるで、葬式を出したその日から、彼の中で、那由子は存在しない者となった様に。

二・雨の日の葬式

頭が痛くて、僕は何も考えられなかった。

ガンガンと頭蓋骨を叩くような衝撃に、僕は必死に喪服を纏う。

今日は絶対に行かねばならない所があるからだ。

しかし、そんな日に限って雨になる。しかも雷でも鳴りそうな程の豪雨。

僕を拒絶し責める様な雨。

窓ガラスに映った僕は、まるで雨に打ちのめされているようだ。

泣いているような、酷い表情。

だから、試しに笑ってみる。

そしたら、とても綺麗に笑えた。

気が付いたときには、僕は僕の写りこんでいた窓ガラスを、そこにあったMDプレイヤーを投げつけて割ってしまった後だった。

慌てた様子で母が飛んできて、業者に連絡をとっている。

その間、僕は窓から吹き込み、フローリングを濡らす雨を眺めていた。

何も考えずに。

「徹、後はお母さんに任せて、下に行つてなさい」

「……うん」

僕に、全く似ていない母。

階段を怠惰的な足取りで下りながら、僕は想像してみる。

写真ですら見たことのない、父親の姿。父親似だという、僕の姿と重ねて、想像してみる。

写真も見たことはない。親類にもあったことはない。母には似ていない。

これは被害妄想だろうか。心配性なだけなんだろうか。

母と僕が家族だという証拠はない。

辛うじて、母の血液型がA型で、僕がO型であると言つことが、かなり怪しいが希望となっている。

一階の居間にいた僕の耳に、インターフォンの呼び出しが届く。

けれど僕は動かなかった。

結局母が応対し、僕の部屋に通す。

「徹、後は業者の方に任せて。那由子ちゃんに会いに行くんでしょ？」

「うん……でも……」

「いいのよ。この業者さんは信用できるわ」

「……………うん」

むんずと僕の腕を掴んだ母の手にはダイヤの指輪。耳と首回りを飾るのは真珠。纏う衣服はブランド品ばかり。

車も外車で、しかも黒いベンツ。

そして僕のネクタイもシャツもスーツもベルトも靴も、ハンカチだって、全部母のもの。

僕の意味なんてない。

そんなものに、興味はなかった。

ただ、彼女が気に入ってくればそれでよかったから。

「ネクタイ曲がってない？」

「…大丈夫」

「じゃあ、お母さんは帰るからね。迎えの時は呼びなさい」

「……うん」

葬式の場所。那由子の家に着き、僕は玄関に立ち尽くしていた。

綺麗に並べられた黒の靴。行き交う人も黒。僕も、黒。

「徹……」

名前を呼ばれて顔を上げると、定が立っていた。

「入らないのか？」

相変わらずの様子で、好こしばかり悲しく微笑む彼は、決して僕に『入れ』と強制はしなかった。

ただ僕が上がってくるのを待っている。

僕が緩慢とした動作で靴を脱ぎ、スリッパをはくのも、急かさずに黙ってみていた。

「皆、奥にいるよ」

「…うん」

ここで初めて定が僕の手を引いた。

定が歩く速度は決して速くはない。なのに、僕はついていくのがやっとだった。

僕は、明らかに現状から逃げようとしている。逃げたいと、思っている。

恐れているのは、自分でも分かっていた。

分かっていたけれど、逃げる訳にはいかない。逃げたら、僕は……。

「……………」

棺なんて、必要ない。

けれど、そこに棺は在った。

「やめろ。徹」

棺についている、閉まった顔を覗く扉を開こうとした僕の手を、彦の左手がつかんで止める。

右の腕は、上着に袖を通していない。Yシャツを肩口まで上げて、包帯を巻いていた。

傷が塞がっていないのか、すこし赤黒くなっているところがある。

「……やめた方が、いい」

僕の腕を掴んだまま、更に一言、誇彦は言い足し、顔を伏せる。

気が付けば、歌江もそこにいた。泣き腫らした目は赤くなっていて、尚も悲しそうにうるんでいる。

何故か誰も居ない、この場所に、三人……いや四人だけがいた。

ハンカチを手にして、不安そうに僕を見る歌江。僕を引き留める誇彦。僕のやりたいように、ただ見ているだけの定。

そして、心配され、氣遣われ、見守られていた、僕。

「あ、あの……阿莉奈ちゃんはね、今日は具合が悪いから、来られないの。……だから……徹くん、阿莉奈ちゃんのこと、怒らないで……ショックだったとおも」

怒らないよ、僕は。

歌江を遮るようにして、僕は笑顔になった。とても綺麗に笑えていた事だろう。

かたかたと震えた歌江の手と心が余りにも痛々しくて、そうするしかなかったんだ。

傷付いてるのは僕だけじゃない。

皆、傷付いてるんだ。

「大丈夫。僕は、誰のことも怒ってないよ」

もう一度、笑う。

少しだけ、頭痛が治まったような気がする。

相変わらず、窓の外は雨。憂鬱には変わりはないけれど、それでも少し気分は晴れた。

……と、僕は一時的に勘違いしただけだったようだ。

それは、那由子を前にして、お坊さんがお経を読み初めてから大分経った頃のこと。

御焼香……というのだったか。

それが回ってきて、香の香りと共に、僕は息苦しさを目眩を感じて、

きつく唇をかんだ。

今、席をはずしたくはない。

那由子にたむける言葉の羅列を、僕は聞いていなくてはならないから。

だから割れるように頭が痛もつともここまで来た。

「……徹。大丈夫か？」

座っていないながらふらふらとしていた僕に、定が声をかけてくれた。

僕はなんとか苦笑して見せたけど、大丈夫なんて言い返せる状況ではない。

煙と香りの充満した部屋。香だけならまだしも、飾られた花の甘い香りも混ざり始める。

そして、低音で唱え続けられるお経。

「……っ」

ゆらゆらと上がる煙のように、僕の視界も揺れ始めた。お経が頭の中で、ぼやけるように反響する。

気持が悪くなってきた。

うつ向き加減になり、膝の上に置いた手を握り締める。

そして、目を瞑った時だった。

カリッ

そんな音が聞こえた。

はっとして顔を上げるが、相変わらず視界は揺れ、お経も反響し続けている。

気のせいだと思い、またうつ向くと……

カリカリッ

何かをひっかくような音が、嫌に鮮明に耳に着く。

それが何の音なのか、僕は分からなかった。

けれど。

カリカリカリッ

その音の後に、小さくカタンと聞こえた瞬間、僕は見付けてしまった。

棺の蓋の隙間から覗く、白くて細い指を。

「……いつ!!」

叫びそうになったのを必死で堪えた。

「……どうした、徹？ 徹？」

僕を気遣う定の声が頭の中で木霊する。その表情はゆらゆら歪んでわからない。

もう駄目だと思った。

「……ごめんっ」

呟いて、席を立つ。

外が雨だと言うことも忘れ、靴を足に引っ掛けて、バシャバシャと走る。

那由子の家の敷地からすら出て、アスファルトの地面を走り、小さな公園に着いた。

豪雨で既に全身ずぶ濡れの僕は、すどん、とブランコに腰かけて、小さく揺られる。

雨の冷たさも、少しの風も、気持よかった。

「ねえ、お兄さん」

「？」

その声は前の方からした。

「お姉ちゃんの事、好きだった？」

お姉ちゃん？

僕と向かい合うようにして、傘をさした少年は笑っていた。

少し、怖い感じのする笑顔。

小学生の高学年位の彼は、傘の内側で笑う。

「お姉ちゃんの、どこが好きだった？」

「お姉ちゃん……？」

「お姉ちゃん」

そう言っ、彼が指をさしたのは、那由子の家だった。

と、言うことは、だ。

「じっ……」

思考を壊すような動揺に、口について言葉が出てきた。

言い訳。

「ごめんなさい、ごめんなさい！」

ブランコから落ちるように降りて、僕は少年にひれ伏していた。

僕は、復讐されるだけの理由を持っている。

自分で伝えればよかった。僕が助けに行けばよかった。止める言葉など振り払えばよかった。

僕が、悪い。

そう。悪いのは全部僕なんだ。僕が、動かなかったから……。

「……どうして謝るの？」

少年が言った。

僕の前にしゃがみ込み、傘を自分と僕にかけるようにして。

笑った。

「どーして、謝るの？」

不思議そうに小首を傾げ、気持悪いほど、僕に顔を近付けて。

「ぼ……僕は……」

「お姉ちゃんのどこが好きだった？ 笑顔？ 泣き顔？ 話方？」

性格？ 気遣い？ 優しさ？ 顔？ 目？ 髪？」

「……………」

考え、あまねいている僕は、さぞ滑稽に見えたのだろう。

少年はただ笑って僕を見る。見て、微笑む。

傘に雨がボタボタと乱暴に当たる音が耳に痛い。ゆらゆらと揺れる視界に、僕はようやく気が付いた。

これは、目眩なんかではない。

「僕は……………」
“那由子”が好きだったよ」

僕は、泣いていた。

ずっとずっと泣いていた。視界が歪んだんじゃない。僕が歪ませていたにすぎなかったんだ。

「……………」
どうして泣いてるの？」

僕が最初の質問に答えたからだろうか。

少年は新たな質問を僕に投げ掛ける。

「だって…那由子が……」

顔を上げた僕は。

歪んだ視界の中で。

とても醜く、そしてはつきりとした笑顔を。

「死んじやった？ 自分のせいだと思ってるんだ？」

にいつと、口が三日月型をつくる。こんな少年が、こんな表情をするなんて。

「自分で言えば良かった？ 制止は振り切って、自分が行けば助けられたのについて思ってる？」

「そ……それは……」

「あの時、阿莉奈に言わなければ」

「！」

少年は笑っていなかった。口だけがその形を作り、声を発している。

「あの時、歌江を突き飛ばしてでも、あそこに行っていたら」

みいるようにして、僕は呆然と少年を見つめる。

「誇彦に任せずに、自分が行けば、助けられたのに」

雨の音すら、僕は消した。

「それってさ、つまり……」

傘を片手に、立ち上がった少年は、僕を見下し、笑った。

麻痺した感覚で、僕は笑いを返す。

そして少年は、言った。

「皆いなかったら……おねえちゃんは助けられたんだよね？」

一瞬、彼の言ったことが分からなかった。

皆いなければ？ いなければ助けられた？ なければ、助けられた。

なければ良かったのは障害。障害は……皆？

伝言を伝えてくれなかった、阿莉奈。

僕を止めた、歌江。

那由子を助けられなかった、誇彦。

……定は？ 彼はなにもしなかった。障害にはならなかった。

じゃあ、障害は阿莉奈と歌江と誇彦。

障害がなかったら。あの三人がいなかったら……僕は那由子を。

助けられた。

「そうでしょう？ そう思うよね？」

それでも、僕は頷けなかった。

だって過ぎたことは仕様がなないじゃないか。今更、そんな事を言っただって。

「でも……もつと突き詰めてみたら？ お兄さんがおねえちゃんと会わなかったら、こんな思い……しなくてすんだよ。おねえちゃんはいないきや良かったんだ」

そう言われた瞬間、傘が中を舞った。

豪雨に打たれながら、ふわりと舞う傘は、泥の上に転がり落ちる。

僕は、那由子の存在を否定されて、思わず少年の傘を……少年を殴っていた。

自分の暴力に、自分で驚いている。

けれど、好こしばかり頬に触れた少年は、笑うばかりだ。

「お兄さんはおねえちゃんが何で死んだと思ってる？」

「事故に決まって……る、だろ」

歯切れの悪い僕。

僕は、どこかで疑っていたのだ。そして、それが本当ならば、僕は。

「事故……かな？ 本当に？ ねえ、お兄さんもそう思ってるんでしょ？」

「思っていない……！」

「思ってるよ」

「なんで、そんな事、分かるんだっ！」

聞かなきゃ、良かった。

聞くんじゃ、なかった。

「おねえちゃんが教えてくれたもん」

雨に濡れた髪の間から、僕を射抜くような目が、笑った口で言った。

「……ね、おねえちゃん？」

雨の音が変わった。形が変わった。

後ろに、誰かいるような気配がする。気のせいかな。気のせいだ。そんなはずないじゃないか。那由子は確に死んだんだ。う、腕しか、見付けられなかったけれど。それに、今、葬式をやってる。ちゃんと棺があった。那由子はあそこに……。棺？ 腕一本に棺？ 必要あるのか？ そう言えば、僕が覗き窓を開けようとしたら誇彦が止めた。どうして？ そうだ！ ここに来る前に、確に棺の蓋が開いたじゃないか。それで手が出てきた。と、いうことは……。

皆が、僕を驚かせようとした、芝居だったんだ。

そして後ろには那由子が。

『振り向いちゃ駄目』

声が聞こえた。

那由子の声だ。

「な、那由子？」

『振り向いちゃ駄目。私、死んだの』

その言葉に、僕ははっとする。

そして出た言葉が……

「う、嘘だっ！」

『嘘じゃないよ。私、死んだの。湖に、突き落とされて、ね』

「嘘だ。信じない。だって後ろにいるんだろ、那由子」

『振り向いちゃ駄目』

少しばかり元気がないが、確に那由子だった。

後ろに、那由子がいる。

僕の、真実。

でも那由子は自分は死んだと言っている。そんなはずはない。そこにいるのに。

「那由子……どうして嘘つくんだ？ もういいだろ？ お開きにしよう」

振り返ろうと一歩下がった僕に、那由子は固くなだった。

『振り返っちゃ駄目』

でも、僕は

振り返った。

雨が叩き付けるように地面ではぜる音。そしてついに鳴り出した雷音に、僕は電源の切れたテレビのように真っ暗な画面を見た。

『振り返っちゃ駄目』

細やかなその記憶すら、雷音は打ち消して、僕は泥の上に倒れた。

気が付くと、自宅の前に立っていた。

何をしにどこに行っていたのかも分からないけれど、この雨の中、歩いて帰ってきたらしい。

黒いスーツ。ネクタイ。ワイシャツ。ベルト。

普段の格好ではない。

「……ただいま」

びしょ濡れのまま、玄関につっ立っていたら、一度顔を出した母が、タオルを持ってかけてきた。

「どうしたの、こんなになって……迎えの時は呼びなさいって言ったでしょ？」

「……ごめんなさい」

ある程度の水分をタオルに吸わせた僕は、浴室に押し込められた。

「風邪引かないようにね！ いるものは置いておくから」

「……うん」

ぱたん、と閉められた扉を眺めながら、僕はうつ向いた。

寒い。

取り合えず暖まろうと思い、僕は脱いだ服を洗濯機に押し込み、白く霞む浴室でシャワーの蛇口を捻る。

お湯は熱かった。

しばらくぼんやりして、僕はぼつりと言った。

「なにやってたんだろ、僕」

どうでもいいか。

僕は、自分に記憶が無いことを知っていながら、それを放置した。

僕は、何かを捨てたんだろうか。

「徹、ここに置いておくからね？」

「うん」

母に頷き、僕は思った。

風邪、引かないようにしないと。

.

三・それから一年

去年の涼しさをあざ笑うかのように、今年の夏は暑かった。

うだるような暑さの中、片岡^{かたおか}翼^{つば}は、数人の先輩と共に、部室でジュースなんぞを飲んでいた。

「まさか、片岡さんに弟がいたなんて知らなかったよ」

コーラ片手に笑うのは、この暑さでも上着を着続ける男、部長の継^{つぎ}刃^は定^{さだめ}だ。

おかしいというか、ミステリアスというか、どうも掴めない。

その隣に座っているのが、私服の先輩、百合荻^{ゆづりあし} 誇彦^{いっかい}。彼は事故で片腕が上がらなくなったために、制服を免除されたのだと聞いた。

「……別に上がらない訳じゃない。けど無理に上げれば肩の健^{けん}が切れるだけ」

「だ、駄目だよ、誇彦くん！ 無理しちゃだめ！」

「……」

誇彦を氣遣ったのは、物静かでおしとやかな先輩である仁井^{にい} 歌江^{うたえ}

だ。誇彦について過剰な反応を見せる一面がある。

そして、部室の端で、足をぶらつかせながら窓の外を見ているのが、部活一のお人好し水無瀬^{みなせ} 徹^{とあ}だった。

「先輩！　こっち来ませんか？」

「んゝ…ここでいいや。ひなたぼっこしたいから」

この暑さの中でひなたぼっこ。想像するだけで暑さが増すが、当の徹は、汗一つかいていない。

ただ、部室の脇にあった大きめの木箱に腰かけているだけだ。

と、ふと歌江が言った。

「…今日、阿莉奈ちゃんどうしたのかな？　お休みだったみたいだけど」

「あれ？　そうなのかい」

「うん、休みだったよ」

首を捻った定に答えたのは、木箱に仰向けに転がった徹だった。

「何か、風邪だって。昨日から調子悪そうだったんだ」

「ああ、そう言えば、放課後、阿莉奈に呼ばれてたね」

そうだったのかと、翼は徹を見る。

昨日の放課後、部活が終わった後に阿莉奈がいつもより早く帰ったのはそのせいだ。徹と一緒に出ないあたり、女の子らしいというか。

「何の、話をしてた？」

そっけない疑問だった。だから、誰もが軽い気持ちで聞いていたのだ。

「……」

「言いたくないなら、言わなくていい」

中々答えない徹に、誇彦は言うが、徹はそっという意味で言わなかった訳ではなかったようだ。

あわてて起き上がり、両手をふる。

「そうじゃないよ、そうじゃない。……よく覚えてないんだ…確ね」

思い出すために顎に手を当て考える徹は、首を捻ながら言った。

「誰だか分からない子の名前言つてたんだよね……ええと……
そう。“那由子”」

その瞬間、沈黙が落ちた。翼と徹はそれに気付かずに話を進める。

「誰でしょうね、その子」

「さあ……聞いた事はある気がするんだけど」

学校全体で封印した事実を知るのは、関わった数人のみ。学年の違う翼には全く分からなかった。徹は、あの日から、記憶をなくしている。綺麗に、那由子に関してのみを。

「ふうん。その話だけ？」

沈黙に気が付かれないように、定がさりげなく口をはさむ。

「さあ……覚えてないな……でも何か、怒らせちゃったみたいだったなあ」

「先輩が？ リナ先輩が勝手に怒っただけじゃあ」

「有り得るね、有り得る！」

少ばかり表情を曇らせた徹に、翼と定が茶化すように笑う。性格状、徹が怒らせる事はまずないだろう。阿莉奈の方が勝手に怒ったに違いない。

こう言うてはなんだが、彼女は思い通りに行かないと、直ぐに起こりだす悪い癖があるのだ。

「でも、珍しいよね……阿莉奈ちゃん、一応、皆勤だったのに」

残念だね、と歌江は苦笑した。

ジリジリと蝉が鳴いて、運動部の掛け声が耳に届く。明日から夏休みだと、あまり実感がわかないのは、このメンバーのせいだろう。

イベントだろうが、アクシデントだろうが、何があっても、この部はペースを崩さない。

何が起ころうと、どうにもならない。

良くも悪くも、そういう人間の集まりなのだ。

「さあて、家に帰ったら、宿題やらないとなあ」

空き缶をゴミ箱目がけて投げつけた定は、思いきりのびをしながら、思いたしなくないワードを笑顔で述べて、部員をあおぎみた。

その笑顔は、とても胡散臭かった。

「うふふ……君の家は涼しいねえ」

部員一同、解散したはずなのに、片岡家には、何故か定の姿があった。

出された麦茶を遠慮することなく飲みながら、翼の宿題ワークを覗きこむ。

「あ、これ、去年と同じだね。私もやったよ」

「本当ですか？ 答え、教えてくださいよ」

「いいよ、ああ…解答の冊子、家にあるけど。でもねえ、全門正解は怪しまれるよ」

「大丈夫です。そこら辺は適当に」

「てだれだねえ」

けらけらと二人が笑う以外、家の中は静か極まりなかった。

「家、両親共働きで、姉貴も仕事いつてるから……家には俺らしきいないんですよね」

へへへ、と笑う翼はどこか寂しそうだっただ。ただでさえ普通よりも大きな立たずまいの家に一人でいるのは、つまらない以上に心細いのだろう。

話を聞くと、しばらく誰も帰ってこない事もあるらしい。

「姉貴は出張ばっかだし、母さんは研究所に籠りっぱなし。父さんは事件が片付かないから帰ってこれないって。俺、どうでもいいのかなあ」

家の片隅にある翼の部屋で、風鈴が小さく音を立てる。

定はその音を聞きながら、ゆっくりと口を開いた。

「私には、弟と妹がいるんだよ。まだ四つ年下でさ」

「へえ……」

「何ていうのかな。父親違いでね。私の父が死んでから、弟と妹の父親と結婚したんだけど……」

笑顔で話ながらも、その内容は暗くて深い。

麦茶のコップを指先で摘むように持って、定は翼に笑いかけた。

「これまた酷い奴でさ。酒乱で暴力男で……ほら、この手の指見て動かないんだ」

グラスを持った手を、少し傾けて、定は自身の右薬指を見せる。他の指がコップを持っているのに対し、薬指だけは何とか触れているに程度だ。

「包丁で、切られかけたんだ。酷いよね。神経は修復出来なかったんだ」

「……」

酷いよね、と言いながら、定は普通に笑う。後光でもさしてきそうな笑みに、翼は思わず怖じ気付く。

夏。夏の暑さを一瞬だけ忘れてしまっていた。

「もちろん、離婚したよ。でね、うちの母親は……私だけを連れて、逃げたんだ」

また、風鈴が鳴った。

「小さな弟と妹を残して。抵抗なんて出来ない子供を置いて。馬鹿な母親だよ」

「そ、そんな……自分の母親を馬鹿だなんて」

入部してから初めて聞いた、彼の悪意のこもった一言に、思わず翼は口を挟んでしまう。

困ったような翼の表情に気が付いたのか、定ははっとした様子で苦笑した。

「ああ、ごめん。こんな話して。少し、焦ってるんだよ。ごめんね」

「いえ……何か、俺の悩みなんて、小さいもんだったなって」

「小さいかどうかは君が決めるんだよ。自分が抱えてる物の大きさは、自分しか分からないんだから」

コップの中で、氷が動いた。定は笑い、翼も苦笑した。

「明日も来ていいかな。私の家は暑いんだ」

そう言われて、翼は驚きつつも頷いた。

どうせ明日も、家にいるのは自分だけなのだから。

ガシャァン

その音を聞いて、徹ははねあがった。

「ああ、やつちゃった…」

「……大丈夫」

夕食の片づけをしていた母親が、皿を落としたのだと気が付いた時、徹はいいしれない安堵感を覚えた。

「大丈夫よ。危ないから、向こうにいなさい」

「……うん」

白い破片を片付けながら、母親が徹に言う。

言われた通りに居間に戻ろうとした徹の耳に、声が聞こえた。

『過保護すぎだよ』

「!？」

声だけでは男か女か分からない。驚いて回りを見てみても、誰もいない。いるはずがない。

「どうしたの、徹。危ないわよ?」

「……え? あ、何でもない」

不審そうに顔を上げた母親に、何とか取り繕った笑みを向け、徹はそのまま自室に戻る。後ろ手に扉を閉め、バクバクとしている心臓を何とか治めようとする。

「気のせい。気のせいだ。何でこんなに……」

『忘れてるくせに。また逃げるの』

「な、何だよ! 何なんだよ!!」

『なにって…忘れてる人に言われたくないなあ。それより喜んでよ』

！ 障害の一つが消えたんだよ』

「な、何の話？」

耳を塞いでも、関係なく響く声に、徹は返答しながらも、ズルズルと扉を背にして座り込む。

電気も付けない部屋は、暗いと言うだけで、熱を奪って行くようだった。ソクソクとした寒さを感じる。

明るい声とは正反対に、徹の表情は暗く脅えに染まっていた。

『これで邪魔が一つ減ったんだよ？ 喜びなよ』

「だから…な、何の話…？」

誰なのか分からない。頭に直接語りかけてくるといふよりは、頭で直接理解している感覚がある。言葉の発信源は自分にある気がした。

懐かしいような、恐ろしいような声。

逃げられない。その思いだけでも、徹は追い詰められた気になっていた。

『この話も忘れちゃったの？ 仕様がないなあ』

小さな笑いの含まれる声音に共鳴するように、ゆっくりとクローゼットの扉が開く。

扉は、その内側に付いた姿見ほどの鏡を徹に向ける。

見たくはなかった。

『ほら、ちゃんと見て』

目を見開いて、凝視してしまった鏡。

それに映っていたのは、自分と、それからそれから……

夏休み。

部活動にいそしむ訳でもない、趣味がある訳でもない誇彦のもとに、メールが届いた。

それは歌江からで、近い内に、出来れば明日にでも会えないか、と言うことだった。

しかし、明日は腕の定期検診があるので、誇彦はそれを説明した後、明後日のなるべく早い時間に会おう、とメールを返した。

四・行方不明

「こんにちは！」

約束の通り、片岡家を訪れた定は、小さな男の子を連れてきていた。

「小六になった、うちの弟だよ」

「ああ、昨日の……」

「春日野 かすがや 名鷹 なたか っています！ よろしく願いしますっ！」

ぱつと花が咲くような笑顔でペコリと頭を下げた名鷹は、あちこちに絆創膏やガーゼを当てている。ヤンチャな男の子、というだけではないようだ。

「……馬鹿なんだよ、うちの母は」

その視線に気付いてか、定は笑う。翼も曖昧に笑いかえし、定と名鷹を招き入れた。

昨日と同じく、冷えた麦茶とクーラーのきいた部屋で、翼と定、名鷹はのんびりと過ごす。特に何もない部屋ではあるが、退屈はしなかった。

「あ、宿題の答え持ってきたよ。……多分これでいいはず」

「やった！」

涼みながら、定は思い出して鞆をあさる。そして中から薄い紙の冊子を取りだし、翼に手渡す。その冊子の表紙には『夏季問題集回答編』と簡素に書かれていた。

受け取った翼は満面の笑みを浮かべながら、問題集の上におく。

「駄目なんだ〜！」

パラパラと翼の漫画本をめくっていた名鷹が、指をさして言う。小さい子は存外善悪に敏感だ。少し融通はきかないが。

「大きくなれば分かるよ」

「……？」

定に頭を撫でられ、不満そうな表情の名鷹。

その場面は、とてもほのぼのと円満な兄弟にしか見えない。

死に別れや離婚、虐待などがあつたなんて信じられない。ましてや、妹と、別れた父親すら死んだなどとは。この光景からは信じられるものではない。

「君は考え事をする、黙りこくってしまうタイプなんだねえ」

「あ、すみません……」

「いや、いいんだよ。ただ、ギャンブラーにはなれないなつて」

そもそもなろうとも思わない。

なぜその話に飛んだのかが不明だった。

相変わらず本棚の漫画本をペラペラめくっている名鷹を見やってから、定は数秒目をつむり、溜め息を着く。

「漫画みたいに、土壇場の奇跡があれば、踏み外してもやり直せるんだろっね」

「……」

しん、となった空白を埋めるように、風鈴がなった。

定の言葉に、翼のみならず、名鷹すら手を止め彼を見る。名鷹の静かな目は、人をゾツとさせるほど真っ直ぐだった。

「踏み外しても、やり直せるなら、もう少し頑張ろうと思えるって……そう思わないかい？」

定の笑顔が痛かった。本当に光でもさしてきそうな優しい笑顔。諦めのような潔過ぎる笑顔。

「……何の話？」

くっ、と首を捻った名鷹に、定は笑う。笑いかけたただ。かける言葉もない。そんな感じの笑顔。

「変なの」

沈黙の後、飽きてしまったように目をそらした名鷹は、また黙々と漫画を読み始める。

少しの静寂の後、定が切り出した。

「ところで翼君。君、阿莉奈から連絡もらったかい？」

「え？」

その話題は唐突で、経緯の分からなかった翼は、キョトンとした反応しか出来なかった。

話を聞くと、夏休みに入ってから阿莉奈と連絡がつかないらしい。

「私は歌江から聞いたんだ。どうやら家にも帰ってないようだし」

「え…ええ？ 連絡なんてもらってませんけど？ ていうか、家に帰ってないって……」

まさしく家出なのでは？

と翼は考えたが、それは違うらしい。

「終業式の前の日から、家に帰ってないらしい。部屋の物も、なに一つ減っていないようだし……家出にしてはおかしいと思うんだ」

そう言って、難しい表情をする定だが、家出を否定するのならば、後はどの選択肢が残るのだろうか。

家出ではないと言つことは、自発的ではないと言つことだ。

それは、乃ち……。

「え……誘拐ってことですか？」

最悪の事は考えない。考えただけでも、何かよくないことが起こりそうだ。

翼の言葉に、定は濁すような顔を返す。確信は持てないようだ。

「あまり推測で言うのはよくない。けれども、その可能性は高いな」

「……探さなくていいんですか？」

「探すさ。明日の朝、部室に集合。今日は誇彦の都合が悪かったんだ」

楽観的に笑う定だが、誰かの都合で延期してもいい話ではない気がする。

納得のいかない表情で視線を下げる翼に、定は小さくため息をつき、けれども笑顔のままと言った。

「本当は今すぐにでも探しに行くべきだとは思っただよ？ けれどもね、翼君。考えてみたまえ。……阿莉奈が行方不明になったと言ったとき、君は口にしただろう。誘拐かもしれないと」

「まあ……いいましたけれど」

「もしそれが本当なら、誇彦の存在は絶対なんだよ。全員の身の安全の為にもね」

そこで漸く、翼は定が何を言いたいのかを理解した。

もし、翼が言ったとおり、それが誘拐だったとしたら、相手はきっと自分らは敵わないだろう。けれども、それには例外がいる。

誇彦が、彼がたった一人存在するだけで、その定義は崩れるのだ。彼は今、片腕が使えないに等しい状態だが、そんなのは関係ない。言葉でいうなれば、本当に、そういう存在なのだ。

「まさか誘拐だとは思わないが……もしも、ということも考えておかないと。痛い目みるのは嫌だからね」

肩をすくめる定は、やはり楽観的だ。今、この瞬間ですら気が気でない翼とは大違い。

「……兄い」

「ん？」

くすくすと笑っている定のシャツの裾を、本を置いた名鷹の手が引

つ張った。笑顔のままで弟を見た定に、名鷹は一言。

「トイレ」

一瞬にして、翼の表情が崩れた。

シリアスな場面なのだというのに、幼い子供の反応といったらあまりに純粋なものだ。状況など気にしない一言に、翼は慌てながら名鷹をトイレへと連れてゆく。

それをほほ笑ましく見送りながら、定は一人、他人の部屋で溜息をついた。

手を水滴の滴るグラスに這わせて、落ちた水滴で適当な線を描く。風鈴が鳴って、そして風が吹いて、涼しい。

「それでも、僕は許したいんだよ。兄弟なんだから」

彼のつぶやきは誰に届くでもなく、そして届けられるようなものではない。

ただ彼は、ゆっくりと天井を向いて、あの幼い弟と、翼の背中を思い出していた。

「……君たちが兄弟だったらよかったのに」

当然、このつぶやきも、誰かに聞かれていいようなものではなかった。

五・探索

それは待ちに待った時間だった。

まだまだ寒さを感じる早朝に、翼をはじめ、部活のメンバーが揃った。

眠そうな徹は、いつもの様に木箱の上に寝そべっている。

「どこをどう探すんだ」

と、誇彦が腕を組ながら言う。それに答えたのは定だ。

「取り合えず、終業式が終わった後に、阿莉奈が行きそうな場所を調べてみようか。それと、校内も少し見ておくべきだね」

さすが部長。自信を持って言った彼は、更に続ける。

「じゃあ今日は、誇彦と歌江、それから私が、街を調べるから、翼と徹は学校を調べてくれないか」

「分かった」

ごろごろとしながら手をあげた徹に、定は頷いて、そろそろと部室から出ていく。

他の部活もやってないような早朝。学校を調べると言っても、何を調べればいいんだろうか。

「徹先輩……どうしましょうか」

「ね。どうしようか。何すればいいのか分からないよね」

起き上がり、言った彼は、ぼんやりと窓から校舎を見上げるだけ。そうして見上げながら、ああ、と呟いて徹は立ち上がる。

「教室……阿莉奈の教室見に行こう」

学年が違うからか、翼は複雑な心境で頷きを返す。

一学年違うだけなのに、踏み込んではいけない気がするのなぜだろう。

「大丈夫だよ。僕がいるんだから」

やんわりと笑って見せる徹に、翼は曖昧に笑いかえす。

確かに徹がいれば、誰か別の先輩に見られたとしても問題にはならないだろう。しかし。しかしだ。

今調べに行くのは、阿莉奈の机。

男子が女子の持ち物を覗くのは気が引ける。

「大丈夫だよ」

職員室から借りた鍵を回しながら、徹は軽く言う。

誰も居ない、校舎三階の廊下。

特別教室側にも、今日は人気がない。

「見付からないから、何してもバレないよ」

「……ですね」

ガチャリ、と意外と大きな音が響き、翼は廊下を見回してしまう。

誰も居ないって、と徹に言われ、翼も彼の後に続く。

夏休みと言うことで、閉めきられた教室は蒸し風呂のようになっていた。徹は、初めに教室の窓を全て開け、風を通す。

「さて……」

「阿莉奈先輩の席は……？」

一度教室ないを見渡した徹は、翼の言葉を聞きながら教卓の上にある、座席名簿を見付けて、見える座席と照らし合わせる。

阿莉奈の席は、窓側の後ろから二番目だ。

「翼君の直ぐ横の席だよ」

言われて、翼は素の机を見て……反応に困った。

「予想通りと言えば予想通りかな」

「女の子の机じゃあないね」

教科書とプリントがゴチャゴチャに混ざった机の中に、流石の徹も表情を曇らせる。

それ以前に、夏休みだと言うのに、何も持って帰ってない彼女に驚きだ。

「取り合えず……ちょっと出してみようか」

苦笑しながら、丁寧にもプリントと教科書、ノートを分けて出していく徹。その様子を見て、きつと徹の部屋は綺麗なんだろうな…と翼は思った。

と、徹が積み重ねた教科書らの一番上に上がっていた、小さめのフォルダが、するりと落ちた。

落ちた滑らかさに似合わない、大きな音を立て、フォルダの中身がぶちまけられる。

「あゝあ……やっちゃった」

ばつの悪そうな表情になった徹が、ちらばった写真達を集める。

翼は写真集めを手伝いながらも、それに写っているのが、自分が知っている先輩達だけだと言うことに気が付いた。どれも楽しそうにしているのだが、一人だけ知らない人がいる。

髪の長い、女の人だ。良く見れば、今、目の前にいる徹と二人で写ってるものが多い。

その写真に写る徹は、今とは少し雰囲気違った。微妙な違いなのだが、写真の方が元気があるというか、輝いているというか。

「翼くん、集め終わった？」

「あ……ああ、はい」

自分が集めたぶんの写真を、適当にフォルダにしまいながら、徹が翼を見やる。その笑顔と写真の笑顔は……やはり違う。

自分で集めた写真を徹に渡した翼は、彼の手元を見ながら、ふと視線を下に向ける。

一枚、拾い忘れた写真があった。

「あ、先輩、ちょっと待ってください」

「ん？」

机の中にフォルダをしまおうとしていた徹に、翼はしゃがんだまままで写真を渡す。

「僕、そこ知ってますよ。昔、一回だけ家族で行ったんですよ！」

そこは空気の澄んだ、とても涼しく美しい場所。森と湖、そして星空。

「そういえば、姉さんが教えたんですね。定部長に聞きましたよ……徹先輩？」

懐かしい思い出の話をしたつもりだった。けれども、徹の表情は氷つき、瞳は見開かれている。

彼がこんな表情をするだなんて、思わなかった。

「せ……先輩、大丈夫ですか？ 徹先輩！」

「……………え、あ…ああ、何？ 大丈夫だよ。ゴメン、何かびっくりしちゃって」

そのただならぬ様子に、翼は立ち上がり、徹の肩を掴み揺さぶる。

がくがくと揺さぶられ、やっと気が付いた徹は、驚くほど変わらない笑顔で翼に微笑んだ。

手にした写真を伏せたまま、フォルダに入れると、無言のままに戸を閉めてゆき、気遣わし気な翼に気付いた様子もなく、徹は教室の扉に鍵をかける。

そして一階に着いた所で、徹が立ち止まった。

「翼くん」

「は、はい!？」

先ほどまでの様子に気をとられていた翼は、声をかけられた事に驚き、返事の声を裏返してしまった。

それに小さく笑った徹は、翼に鍵を渡す。

「え？」

「ちよつと悪くなっちゃったから……それ返しておいてくれる？
僕、帰るよ」

「あ、そうですね。先輩達には言っておきます」

「うん。ありがとう」

微笑んで、生徒用玄関へ向かう徹の背を、翼は見送った。

その後、部室で定らの、成果無しの報告を聞いてから、それぞれに解散した。

定と誇彦、歌江と翼。

その日、顔を合わせたのが最後だった。

次の日、歌江がいなくなつたと連絡がくるだなんて……。

六・犠牲と進展

『徹？ 今どこにいるの？』

「ああ、母さん、心配しないで。友達の家」

『そうなの？』

「ちょっと湖の近くで……涼しいから泊まって行けって誘われたんだ」

『まあ……ちゃんとお礼は言っのよ』

「うん分かった。明日の朝には帰るよ」

『分かったわ。気を付けてね。お友達によろしく言っておいて頂戴』

「はい」

そして携帯は閉じられた……

いつの間に寝たのか。ベッドで目覚めた徹が携帯を見ると、阿莉奈を探しに行った日から、既に2日がたっていた……。

歌江が姿を消した事に、最初に気が付いたのは誇彦だった。

と言っても、一日の大半の時間が過ぎ去ったあとだったのだが。

誇彦から連絡があったのは、例のごとく翼の部屋に涼みに来ていた定と名鷹が、そろそろ帰ろうか、と相談していた時だった。

「……」

律儀にも同時に鳴り出した着信。メールの内容は至って簡単だった。

た。

『歌江失踪』

簡潔過ぎて呆氣にとられるほどだ。しかし、だんだんと状況を理解してきた翼は、ばつと顔を上げて定を見やる。

当の定は顎に手を当て、目を細めていた。

何を考えているのか分からない表情で思案し続ける彼は、何か文章を打ち返して、名鷹の手を握り、立ち上がる。

「今日の所は誇彦にまかせて、私達は大人しくしていよう。大丈夫。誇彦ならうまくやるさ」

満面の笑みを浮かべる定は、釘を刺すように言った。

「今日は家で大人しくしてるんだよ」

「だよー！」

兄の真似をして両腕をつきだした名鷹に、微笑みを向け、翼は頷く。

「分かりました。……でも、明日は」

「明日は、ちゃんと調べるよ」

玄関先まで送って、翼は定と名鷹に手を振る。

そして、また来てね、と言った。

次の日来たのは、大きな荷物を持った名鷹だけ……。

定からメールの返信が来てから、漸く一夜が明けた。誇彦は病院

へ行かなければいけないところを、逆方向へ向かうバスに乗っていた。

目的地は閑静な住宅街。定は昨日、こう言ってきた。自分が阿莉奈を探すから、誇彦は歌江を探せ、と。

そして、徹の家の住所まで送りつけてきた。行け、と言うことだろう。

車内アナウンスで、目的のバス停が次だと分かった誇彦は、あげかけた右腕を下げる。この角度から上げて、上がりきらない右腕では届かない。

仕様がなく、軽く立ち上がってボタンを押した誇彦は、軽いその音を聞きながら、席に座り直す。

窓の外はいたって普通だ。夏の、静かな住宅街。

誇彦らが飲まれた、渦などには無関係に、穏やかだった。

他の家よりも、一回り大きな洒落た家。そこが徹の家だった。

「ごめんなさいね…徹、疲れてるみたいで」

「いえ。こちらこそ突然すみません」

通された居間で、輝く様なティーカップに注がれた紅茶を眺めながら誇彦は頭を下げる。

ずいぶん若い母親だ。若く見えるだけなんだろうか。

「そうそう、ねえ、あなた……徹を昨日泊めてくれた人かしら？」

「……」

紅茶を口に運びかけていた手を止め、誇彦は静かに徹の母を見た。嘘を言う必要はない。微笑む彼女に、誇彦は小さく否定の為に首を振る。

「俺じゃなくて……歌江だと思います」

「あら、そうなの？」

「多分……それで、何処に泊まったか分かりますか？」

歌江が泊めた、と言ってしまった後に、誇彦は失敗した…と眉を潜めた。

まがりなりにも高校生。夏休みに男女で泊まりはないだろう、と。例え、歌江の家族と一緒にであろうとも、説明するには少し苦しい。

だが、徹の母親は、誇彦の不安など気にせず、話を続ける。気付かなかったのか。

「場所は言っていなかったけれど……そう、湖の近くで涼しい所って」

「……そうですか」

湖と言われた瞬間、誇彦の右腕がフラッシュバックでもしたかのように痛みだした。感触を思い出す様に、掌が握りこまれる。そこに彼女の腕がある、そう言いたさげに。

あの場所に。あの場所に、また戻るのか。全て、あの湖に。

「どうかしました？」

余りに長い時間誇彦が無言で居ることに不安を覚えたのか、顔を覗きこんだ彼女に、誇彦ははっとする。

「いえ。用事はこれだけですから……今日はすみませんでした」

「そんな事ないわ。また遊びに来てね……徹、あの日から元気がなくて」

「……失礼します」

力なく苦笑した徹の母親。誇彦はかける言葉を見付けられずに、深く礼をして玄関を開ける。

自分の家から出ていく誇彦の姿をぼんやりと眺めていた徹。彼の部屋は暗い。カーテンは閉め切られている訳ではないが、光を遮るには十分だ。

『ほら、あれが最後』

「……」

波紋が広がるように、頭で理解出来る声に、徹は反応を返す事はない。ただ聞いているだけだ。

言うなれば、目を開きながら寝ているような感覚。

今の徹には明確な意識はなかった。

『雨、降りそうだね』

その声に、徹はゆっくりと視線を空に向けたただけだった。

その頃、定はとある古い貸屋の前に立っていた。黄色いテープで入り口を閉ざされた、そこを見つめる。

数週間前、小学一年生の少女とその父親が他殺体で発見された場所。

「美希……誕生日だったね」

しゃがんでテープに寄りかからせる様にして置かれたのは、白くて可愛い封筒を抱えたクマの人形。そのクマの頭を撫でて、定は微笑んだ。

「美希。美希には私の秘密、全てを教えてあげるよ。美希が見れなかった事も、全部全部……」

そう話しかけても、返ってくる声はない。

クマの人形は、一点を見つめて白い封筒を抱き締めるだけだから。

外には雨が降っていた。滝のように降る雨を眺めながら、徹は目を細める。雨の日は嫌いだ。

頭が痛くなる。

「徹？ 入るわよ？」

ノックの後に入ってきた母親に、徹は意味もなく笑みを向けた。
どのような顔をするべきか分からない。

相変わらず部屋は暗かったが、彼女は電気をつけようとはしなかった。徹が嫌がるのを知っていたから。

「今日、誇彦くんが遊びに来たのよ？」

「うん」

「昨日は歌江ちゃんと一緒だったの？」

「……え？」

分からなかった。昨日、誰と一緒に、何処にいたのか。ずっと悩んでいたけれど、分からなかった。

答えられずにいると、徹の携帯が鳴る。けれども母親は、それに関係なく話を進める。

メールを出してきたのは定だった。

「あのね、歌江ちゃんが一日からお家に帰ってきてないみたいなのよ」

『一昨日、私達と分かれてから、歌江が家に帰らないそうなんだが……』

耳に入る母親の声と、目で負うメールの文面。

「ねえ、徹」

『なあ、徹』

奇妙な一致を見せるそれぞれに、徹は表情を作る余裕すら無くし、母親の顔を見る。

「昨日、本当に歌江ちゃんといたの？」

そして、携帯に視線を落とす。

『昨日はどこにいたんだ？』

徹は直感した。自分は疑われているのだと。

思えばそうだ。阿莉奈と最後に会ったのは自分。疑われるに値する。

でも……と、徹は愕然とした。自分には、やっていないと否定する証拠がない。覚えていないから。

『……やってないって言いきれないよね。動機もあるし』

「……う」

波紋の言葉が胸に刺さる。

彼奴等サエ、邪魔シナケレバ

彼奴ガ、助ケテクレテレバ

彼奴等ガ 彼奴ガ

動機はある。でも、でも……。

ふと見た窓ガラス。雨に打たれた自分がいた。叩くように降る雨の中、窓ガラスに映る徹は、笑っていた。

楽しそうに、満面の笑みを浮かべ。

「うわあああつ!!」

「きゃああつ!?!」

ガラスが碎け散る音。血が滲んだ右の手。

だが徹は、痛みを感じていない。

次に目に入ったのは、テレビの画面。それに映った自分も笑っていた。

自分が、自分を見て嘲っている。気持ちが悪い。

止めようとする母親を振りはらって、徹はテレビを持ち上げて、重力にまかせ床にたたき付ける。画面は粉々だ。

更に、徹は見付けてしまった。自分を映すもの。

半開きになっていたクローゼットの鏡。一番大きな物。

『壊すの？ 鏡を割ったって、僕は……』

「うるさい！」

声にお構い無しに鏡を殴りつけた徹は、それでは足りない、と言わんばかりに、思いきり蹴りを入れる。

足元に散らばるガラス片。傷付き続ける徹に、ついに母親が後ろから抱きつくようにして止める。

「徹！ どうしちゃったの!？」

悲鳴じみた声に、徹は動きを止め、カクンと両膝を付く。

本当に、自分はどうしてしまったんだろう。

声の事を母親に話そうかと思った。しかし、それは瞬時に却下される。

疑われているのに。本当の子供かどうか怪しいのに。

「……翼…翼くんなら……」

信じてくれるだろうか。

「徹っ!!」

「……ねえ、母さん」

ふらつと立ち上がった息子を追い、その腕を掴んだ母親に、徹は問掛けた。後ろは振り向かずに。

「僕は母さんの息子なの……?」

「何言ってるの! 私の息子に決まってるじゃない!」

「そう……か」

「……弟だっているのよ」

ぴく、と徹が動きを止める。弟？

「今は一緒に暮らしてないわ。……まだ、二歳」

「二歳……？」

そんな馬鹿な。全然気が付かなかった。どうして気が付かなかったんだ。なぜ……？

「私は、貴方に嘘をついたのよ。出張に行くって言って、那由子ちゃんのお家にあずけた」

「……なゆこ」

「貴方に言えなかったの！ 私は再婚しようとしていた事も、弟が出来た事も……言う前に、その人も死んでしまったから！」

母さんに愛されたら死ぬんだろうか、と検討違い奈事を考えながら、もう半分で徹は違うことを考えていた。

考えるほどに、その通りだと思う。僕はもう、いない。

「徹！」

ついに玄関まで来てしまった。懇親の力で止めようとする母親に、徹は軽く微笑んだ。

そして呆氣にとられた彼女に追い討ちをかける。

「弟がいるなら、僕がいなくたって寂しくはないよね」

力が抜けてしまった母親の腕からすり抜け、徹は家を出た。

どしゃ降りの雨。濡れることなど、気にせずに。

「せつ、先輩!？」

「翼くん……翼くんは、僕を疑ってる?」

「は? 何の話ですか? それよりもびしょ濡れじゃないですか! 入ってください……わあぁっ!? 先輩、血が!」

早口で引つ張ったり戸を閉めたり、タオルを持ってきて叫んだり。

常と同じ翼様子に、徹は表情を緩める。

「お茶飲んでください。暖まりますよ。……僕は父さんの服、借りてきますから」

リビングに引きずってきて、適当にガーゼをテーピングで止めた手と足。

指先で湯飲みを持つようにして、徹は肩から力を抜く。

「先輩、これ着てください。多分、父さん着ないんで」

タンスの奥ふかくに眠っていた、青いパジャマ。一度も使った様子がない。

が、それでも翼はいいと言った。

「じゃあ、ありがとう……」

影へ行つて着替えた徹は、戻ってきた後、直ぐに、傷を包帯で巻かれた。

「……何したんですか、先輩」

「……僕は」

急にすぎすぎと痛みだした手と足の傷。そして、溢れて来たのは涙だった。

急にだ。痛みと共に、同じ様に痛んだ心。

裏切られたと思っているのかもしれない。疑われた事を、裏切りだと思つたのかもしれない。いや、かもしれない、ではない。

裏切られたと思っている。

「僕じゃない……」

「先輩」

「僕じゃ……」

信じてくれなかった周囲。唯一、疑ってすらいないのが翼だ。

翼は今日一日、名鷹の相手をしていて、家から出ていなかった。

「先輩、分かりましたから」

「何で、定も誇彦も母さんも……」

「先輩」

「……、僕を…信じてよ」

その言葉に、翼がなんと答えたのか。

階段の踊り場にしゃがみこんで聞いていた名鷹には聞こえなかった。

.

六・犠牲と進展（後書き）

貴方は、徹先輩を信じるのでしょうか……？

七・一人だけの正義

朝方、例のごとく呼び出された翼は、言われた通りに校門の前に立っていた。

今、家に居るのは、徹と名鷹の二人だ。徹には話をしてあるが、名鷹は起きてくれず、話をしていない。

なるべく早く帰りたいかった。

と言うより、定に引き取りに来てほしかった。どうして一晩ほったておいたのか。

「おはよう」

「あ、おはようございます、誇彦先輩」

「おはよう、諸君！ ああ、名鷹をありがとう」

「定先輩……何してたんですか」

丁度正反対の方向から現れた二人に、翼は小動物の様に首を左右に振って、挨拶をした。この時点では、翼の家に徹が居る事実を誰も知らない。

「それで、何か分かったんですか？」

何のために呼び出されたのかいまいち理解していない翼は首を捻る。自分と同じような表情で、定に視線を向けた誇彦を見て、彼も呼び出された側だということが分かった。

二人の視線を受けて、定が微笑む。

「何か分かった……というか、見付けちゃったって所かな」

定の常と変わらない様子に、翼も誇彦も、黙って彼の後について行く。何を見付けたのか、定は言わなかった。

それを見るには、相当の覚悟がいるというのに。

「あの、部室ですけど」

定に連れてこられたのは、何かがある事に使われていた部室。

此処何日か使っていなかったせいで、非常に熱い。そして、特有の臭いがこもっていた。

無言で扉の全てを開けた誇彦だが、風が入ってこないことには、何も改善されない。

無意識の内に表情が曇ってしまう部室の中で、定が見付けたのは

木箱だ。よく、徹が寝転がっていたあの木箱。

翼が入部当初からあった木箱だ。

「……」

「……」

翼の頭上で、定と誇彦が顔を見合わせ、誇彦が木箱に手を伸ばす。本能で木箱から放れた翼は、黙って開いてゆく木箱を見つめる定を見上げた。

蓋が開けられた瞬間、部屋を濃い香りが満たす。香りというか、悪臭。

さしもの誇彦も表情を歪ませ、木箱を覗きこむ。

「……う」

翼は口に手を当て、木箱の中にあつた白い布と、それにくるまれた何かを見る。

思考は激しく否定している。あれは、ぐるぐるに白い布が詰め込まれているだけであつて、中身は存在しないと。

しかし、それは簡単に打ち破られる。

ぱらっ、と誇彦が布の端をつまみ捲った。その下にあったのは……

「う、ううっ」

見た瞬間、翼は口と腹を押さえて、一番近い水のみ場へ走っていった。

誇彦は表情を陰しくし、二度目の定は無表情に見下ろす。

阿莉奈だったものを。

「警察には？」

「今から」

「……何で見付けた時に連絡しなかったんだ」

「さあ。私だってね、動揺することがあるんだよ」

「……」

携帯を取りだし、110を押した定をしり目に、誇彦はそれを見つめる。

白い布は、一番上に被せてあるのだけが白く、下のものは赤く染

まっている。尋常じゃなく、尚且複数の箇所が赤くなっているのを見ると、何回も刺されたか斬られたかしたのだろう。

腐りかけの悪臭。はみ出ている髪の毛。

棺としては少々狭いそれは、今の今まで気付かない程に部屋に溶けこんでいた。臭いも気にならなかった。

そして木箱に寝転がり、汗一つかいていなかった徹を思いだし、誇彦はドライアイスか何かを使ったんだろう…と推測をたてる。木箱の事を徹は知っていたのだ。

「……やっぱり彼奴が」

呟いた誇彦に、定が顔を上げる。

「ここは私が何とかするから」

よろよろと戻ってきた翼の為に部屋から出た三人は、互いに顔を見合わせた。

そして定がいう。

「自分のやりたいようにするといい」

その言葉に、大きな意味があるのかただ言っただけか。

それを考える余裕の無い翼の肩に、定の手が置かれる。

「翼くん、名鷹を頼んだよ」

そう言われて頷いた翼は、家の前に着くまでの事を覚えていなかった。

時間は遡り、翼が呼び出しに応じた後の事。自分にはメールが来ない事に軽く傷付きながら、徹は彼の家の今にいた。

昨日の夜に洗濯した服を着て、テレビもつけずに

。

翼には、もう一人、家に人が居ると聞いた。定の弟で言うことだったが、徹は小さく溜め息をつく。

定に弟が居るだなんて聞いたことがない。それに、今は弟と言われると、辛い。

だが、その子どもを前にした徹には、そのような思いは杞憂に過ぎなかった。徹は、彼を知っていた。

「久しぶりだね、お兄ちゃん」

「……君は」

雨が降っていた。彼と出会った時は、雨が降っていて、雷が鳴っていた。

「お姉ちゃんのお葬式以来だね」

そうだ、葬式をしていた。だが、自分はそのから逃げ出したのだ。だが、誰の葬式だったか。思い出せない。

「仇はとれた？」

仇。誰の仇だったか。

思い出せない。思い出してはいけない。振り返っちゃ、駄目なんだ。

小さな男の子がするとは思えない、鋭い目付き。不気味な笑顔。

「後一人でしょ？」

『最後の一人』

前からは少年の声。後ろからはあの声。

そう。そうだった。

「那由子……」

徹が振り向いた先、そこで微笑むのは、最愛の彼女だ。

歪むような笑顔の徹。微笑むの那由子。嘲う名鷹。

徹には那由子が見えていた。名鷹には見えていない。

あの日から、それは始まっていたのだ。あの日、那由子を“お姉

ちゃん”と呼んだのも、漬け込む様な事を言ったのも、全てが名鷹の計算だった。

初めは偶然だったのかも知れない。だが、名鷹はそれを見付けてしまったのだ。

幼さを武器として、彼は微笑む。

ふらり、と出ていった徹の行き先には見当がつく。そして名鷹は、今のテレビをつけた。

後は勝手に結果が出るだろう。

全員が死ぬかどうか。誰が生き残るか。後、兄がどう動くか。

このゲームが、将来の自分にどんな影響を与えるかも分からずに、彼はテレビ画面を見て、笑い声を上げた。

やっこの思いで家に帰りついた翼は、額に濡れタオルを置いて、ソファーに横になっていた。氣遣わし気な名鷹の視線を受けながら、自分を落ち着かせるのに必死だ。

自分の横で昼食を進める名鷹に苦笑を浮かべ、手で制して、息を吐く。

時間が許すまで、延々と眠れもせず、横になっていた。不快感と戦いながらまどろんでいた彼を起こしたのは、携帯の着信だった。

ゆっくりと携帯を開き、電話に出る。相手は誇彦だ。

そして、一言。

『これから、あいつを殺しに行く…… ブッッ』

「……」

五秒も無かった。それを声ではなく言葉で理解した時、翼は跳ね起きた。

驚いている名鷹を見て、部屋を見渡すが、徹の姿がない。彼がない。

「名鷹くん、先輩……朝、ここにもう一人いなかった!？」

「お兄ちゃんが一人いたよ」

キョトンとする名鷹は、それでも答える。その言葉に、翼は更に質問を重ねた。

「その人、どこに行ったか分かる？」

それに名鷹は少し考える風に首を捻った。が、ぼん、と手を打つ。

「湖に行くって」

「湖って……」

翼が更に問おうとした瞬間だ。

誰かが来たらしい。インターフォンが鳴り、戸が叩かれる。

「翼くん、私だ！」

「定先輩！」

廊下を走り、開けた先にいたのは、紛れもなく定だった。

彼も定と同じく焦りの表情で、携帯を手にして居る。誇彦から電話があったらしい。

「名鷹、お家に帰ってなさい」

「えー」

「出かけないといけないんだ」

翼のわきから顔を出していた名鷹を手招きで呼び寄せ、定は言う。それに渋々ながらも従う名鷹は、荷物を取りに、二階へ上がる。

「先輩……」

「湖に行くよ、翼くん。君は……どうする？」

「……」

「僕は強制しない。……君がしたいようにしなさい」

翼は目をつむる。

降りてきた名鷹は、もう準備万端だ。

「僕、行きます」

言うなり、家に戻った翼。それを見てから、名鷹は言った。

兄である、定に。

「兄が兄なら弟も弟？」

「……」

「それとも、逆かな、お兄ちゃん」

「…名鷹」

その時の定の目は、酷く冷めて、そして暗かった。邪魔するな、と言わんばかりの。

時は早い夕刻。日が沈むまで、まだ時間がある。

今日という日は、まだ終わらない……

.

七・一人だけの正義（後書き）

貴方の行動は、定先輩に言われる前から決まっていたましたか？

八・人食いの湖にて

湖は、静かだった。

かつて起こったことも、今から起こることに対しても、ひたすら静かに、美しかった。

その湖の栈橋で、徹は湖を眺めていた。あの時、二人で見ようと
思っ
て見れなかつた景色を。

前日の雨で、少しばかり水かさのました湖は、それでも十分に透
き通っていた。星も輝いて、巨大な水鏡に映る。

「徹……」

「なあに、誇彦」

薄い笑みを向けた徹に、誇彦は険しい表情のまま、彼を睨みつけ
る。敵意よりも、殺意。

誇彦は、様々な事から推測をたて、その証拠を集めてきた。そして、最後の希望が無くなったのを、先ほど自分の目で確かめてきたのだ。

歌江が、殺されていた。その事実を。

合宿所のロビーで、あの日に別れたままの服で、倒れていた。刺

されたとも、斬られたとも言えない傷。飛び散って、広がった血液は黒く変色し、彼女自身の肌の色も変化し始めていた。

胸に広がるのは、とても不快な、しかし抑えがたい黒の色。吐き出したくても、吐き出せない思い。

殺してやる

そう思っていた。つい先刻までは。

だが誇彦は考えてしまったのだ。それが情けになって、弱みになることも理解しながら。

今の自分の思いを、徹は一年前からひた隠しにしてきたのではないかと。徹も、自分と同じ気持ちなのではないかと。

「……」

「後、一人なんだよ」

「？」

なんと言葉をかければいいのか。誇彦がどもっている、徹が一步を踏み出した。同時に言った言葉の意味が分からない。

「後、一人。仇がいなくなったらさ、楽になれるかな」

「仇……俺か」

「そう……。ねえ」

引きずるような足取りと、ガリガリと地面とぶつかる金属音。彼は何かを持っている。片手に。

徹よりは遅い足取りで、確実に後退さる誇彦は、ジワジワと痛み始めた右腕に瞳を細める。

病院にいつていない。痛み止の薬も飲んでいなかった。

「どうして助けてくれなかったんだよ……」

「徹……っ!？」

もの悲し気な表情で歩み寄ってくる徹に手を伸ばした瞬間だ。決して軽くない物が、誇彦の耳元から肩先、足下へと落ちる。

えぐれた地面に突き刺さったのは、赤い斧。よく消火器の横に備え付けてあるような、緊急用の用具だ。

赤黒く汚れたそれを引きずり、徹は誇彦の胸ぐらを掴む。誇彦の胸を締め付けるような笑顔で、彼は囁く。

「どうして助けてくれなかったんだよ。……どうして僕を疑ったの？ あの時、僕は君を信じたのに。助けてくれるって信じたのに。裏切られても信じたのに。……ねえ、誇彦。何で誇彦は僕を信じてくれなかったの。何で裏切ったの。君は僕に、何も返してくれなかったね」

「……。俺は、誤解であれば良いと思った」

自分を掴む徹の手首を掴みかえし、誇彦は睨む。

「真実を追求すれば、俺の中の誤解が解けると思った」

しかし、誤解は解けなかった。それどころか、推測が真実になってしまったのだ。

「裏切ったのは、お前だって……」

「僕じゃないよ」

「……じゃあ、それは何だ」

誇彦の言い分に腹を立てた様子もなく、徹は笑顔で否定する。分かりきっている事なのに、否定を口にしたのだ。

「誇彦が斧を示したとしても、それは変わらない。『僕じゃないよ』の一点張り。」

「僕じゃないよ」

「……じゃあ誰が？」

「僕」

馬鹿にしているのか、と怪訝な表情になった誇彦に、徹は言った。

「誇彦が知ってる僕はやってない。那由子を忘れてた僕はやってないよ」

「！」

「やってるのは僕。那由子を忘れなかった僕がやってるの」

ブン、と肩先を再度かすめた斧。胸ぐらを掴む手のせいで、避けるにも限度がある。少しばかり服が切れた。

「忘れられるわけないのに。馬鹿だよな」

「二重人格？」

「さあ。どうか。もう僕は僕だから……僕しかないよ」

と、手を放した瞬間、斧がふりおろされ、誇彦の左腕を裂く。

「先輩!!」

「やめないか、二人とも!」

そこに漸く駆け付けた翼と定。

遮るように間に立つ翼は、徹が手に持つそれを見て、僅かに怯む。

定は、誇彦の傷を見て、慰め程度にしかならないが、持っていたハンカチを巻く。そして、徹を見た。

小さく笑う彼を。

「退きなよ。怪我するよ」

「退きません!」

ガクガクと足が震えているのが分かる。張り上げた声も震えている。

目の前の人は、本当に、徹なんだろうか。

自分に『信じて』と言った彼なんだろうか。

一歩一歩、歩み寄ってくる彼は、本当に……。

「翼、奴を信じるな！」

その言葉に、体が動いた。

叫んだのは誇彦。だが誇彦は、翼がまさか、前方に走り出すとは思っていなかっただろう。

走り出した翼は、振り下ろされる斧よりも速く、徹に体当たりをくらわせる。大きくよろめいた徹の足は、棧橋から離れ、翼と共に湖に落ちる。

水かさが増えたとはいえ、足がつかない訳ではない湖で、水中から顔を出した翼は、その瞬間、頭を掴まれた。そして冷たい湖に押し込まれる。

「邪魔をしないで」

息を止めていられなくなって、空気の泡を吐き出した翼の肺は、酸素を求めて、水を吸い込もうとする。それでも耐える翼が、もう少しで溺死するというときだ。

両わきから手を入れられ、湖から抱き上げられる。いつの間にか消えていた徹の手。

「あ、かはっ……げほげほっ!!」

「翼くん、落ち着いて。ほら深呼吸」

翼の体を支えて言う定は、翼の彼の背中をさする。気管にまとわりついた水分を飛ばすように咳をする翼は、激しい水音に視線をあげる。

湖の水でうるんだ視界で、誇彦と徹が対峙していた。

「先輩……っ!」

「翼くん、待ちなさい!」

水をかきわけ彼らの合間に入ろうとする翼を、定が止める。それでも、翼は振り払った。

「徹、悪いが俺は死にたくない」

「うん」

「もうやめにしないか」

「無理だよ」

「……抵抗するぞ」

「うん」

異様な会話だ。

徹が笑顔で頷いているのが、異様な光景だ。片手に斧を握り締め、くすくすと。

何が楽しいのか分からない。

水の中のせいか、二人の動きが酷く遅い。同時に翼自身も、二人の場所にたどり着けずにいた。

体が重い。

「……」

そんな彼らの姿を見ながら、定は一人、岸近くで携帯を耳に当てる。

「夜分遅くにすみません。友人が斧で……」

警察を呼んだ定の口調は丁寧だった。あまりにも丁寧すぎて苛々するほどに。そうしながら定は、あの輪の中に入ろうとはしない。傍観者として、立たずむだけ。

「よろしくお願いします」

携帯を閉じて、定はそこを動かなかった。

「ひっ!？」

激しい水しぶきが翼の眼前で上がる。驚き身を縮める翼など関係なく、徹は誇彦を目がけて斧を振り下ろす。

避けるばかりの誇彦は、『くそっ』と吐き捨て、右肩に彼が手をやる。その隙を、徹は見逃さない。

ガッンッ、という音に、身を縮めたままの翼が瞳を見開く。

刃とは反対側の平たい部分が、見事に誇彦の側頭部を殴りつけていた。水面に崩れ落ちた誇彦。血が滲む湖面。

「先輩!!」

自分が、こんな大きな声を出せるとは思っても見なかった。

バシャバシャと水をかいて誇彦を助けようとする翼の前に、徹が立ち塞がる。無表情で見下す彼の表情には笑みがない。

萎縮するように動けなくなった翼は、ただ彼を見るしかない。

「先輩じゃない……」

蚊がなく程度の、それ以下の声しか出ない。聞こえなかった風の徹は、暫く翼を見ていたが、はぁ、と息を付くと、斧を振り上げた。

「やっぱり邪魔するんだ」

落ちてくる斧。息を飲んだ翼は、目をつむってそれを避け、誇彦の方向へと泳ぐ。

と、ぐん、と何かに引つ張られた。何に引かれたのかは分からない。しかし、それは確実に翼を引つ張る。

「……そっちは、駄目だ」

「え？」

その声は徹。ゆっくり顔を上げ、翼を見た。虚ろな感じの彼は、そこからは動かずに言う。

徹には見えていた。彼女がそこに立っているのを。黙って立っているのを。

「僕が行くから……僕が……」

手にしていた斧から、容易く手を放した徹は、迷わずに潜る。それについていった翼は、いきなり何かに引き込まれ、半強引に湖に姿を消した。

その様を見ながらも、定は何もしない。蚊帳の外、と言う風に、見ているだけだ。そこに立って、誰が上がって来るかを。

それは奇跡に等しい目覚め。はっとして目を覚ました誇彦は、自分が流されているのを知った。

一年前のあの日と同じ感覚。

「……っ!？」

しまった、と思いながらも、誇彦が水面に視線を向けた時だ。徹が、自分の横の流れに逆らわずに通る。

はっとした誇彦が彼の腕を掴む。

その瞬間の彼の表情。暗い水底の様な、目だけで人を射抜けるほどの怒り。

それでも誇彦は放さない。

今度こそ離すまいと、死なせまいと。

暴れる徹を押さえ込み、再度浮上を試みる誇彦だったが、思うように上がれない。齒を食いしばり、伸ばした右手。

それを翼が掴んだ。本来、肩より上に上げることすら許されない右の腕。

自らも少し流されながら、それでも今の誇彦らを引き上げるには、十分な補助力となる翼。彼は、ギリギリと絞め上げるように自分の

手を握り締める誇彦に、僅かに疑問を、不安を感じ始めた。

しかし、それよりも今は速く湖から上がらなくては。

更に力をます誇彦の手。手首が折れるのではないか。翼がそう思った瞬間だった。

ブツン！

ゾツとする、力の抜けた誇彦の手を握り締めながら、翼は寒気を感じた。

遅れて、ゴバァツと、泡が上がる。

チラリと見ると、誇彦が苦悶の表情で、けれども必死に足を動かし、水面を目指す。

後もう少しで！

翼が懇親の力で水面に指先を出し、バシヤリと音を立てた瞬間、急に体が軽くなった。

「いたぞ、こつちだ！」

みると、スーツを来た大人……

「お……お父さん？」

そこにあっただのは、翼の父。と言うことは、警察だ。

助けられた事を嫌がり、湖に戻ろうとする徹と、右肩を押さえ、頭と左腕から血を流す誇彦。そして、ただ見ていた定。

翼は毛布にくるまれ、定と共に、父の車で病院へ行った。

長い一日。

日が昇ったのに、どうして一日が終わった気がしないんだろう。

.

八・人食いの湖にて（後書き）

貴方は誇彦先輩に従おうと思いますか？

九・ 陸の螺旋と水の終焉（前書き）

徹先輩を信じた貴方へ。彼の真実を贈りましょう。

九・ 陸の螺旋と水の終焉

何故かは分からないが、徹は普通病院の病室に籠っていた。警察が取り調べに来ることも無ければ、誰かが会いに来ることもない。

カーテン出絞めきり、鏡は破られて、テレビの画面は粉々。ガラス製品の物も容赦なく打ち砕かれていた。そうしなければ生きていけない。

徹はそう悟った。

鏡に映る自分。あれはドッペルゲンガー。あれは自分を殺しに来るのだ。友を殺して、最後に自分を……。

病室の端にあるベッド。シートにくるまって、カタカタと震える。食事もなくにとらず、点滴や注射などはもつての他だ。

湖に行ってから経った時間は三日ほど。だが徹はそれを理解していない。

彼は、延々と夜を繰り返していた。理解しきれない恐怖の螺旋。フと沸き上がる破壊衝動。鍵のかけられた扉。孤独。

叫んでも誰も来ないのは分かっていた。けれど、ナースコールを押すと、誰かが来てくれる。扉の外側からだが、声をかけてくれる。その、脅えた声。

自分を脅える声に脅え、鏡で笑う自分に脅え、自分を疑う者に脅えた。

「那由子……」

そんな彼の唯一。それは目覚めてからずっと頭に浮かぶ少女。思い出の彼女。

忘れていた、忘れなければいなかった少女。

『あたし、那由子ってゆうの。よろしくね、徹君』

『よろしく』

彼女との出会いは遅かった。彼女と初めて出会ったのは、高校の

入学式。だが、席が隣になった訳ではない。帰りがけ、校門で唐突に声をかけられたのだ。

可愛い子だと思った。明るくて、いい人そうだと。

『徹君、私ね、この部活に入ろうと思うの』

『へえ……絆って、部活の名前？』

『そう！ 皆で仲良くする部活なのよ！』

『楽しそうだね』

『徹君も入ろうよ！』

『……うん。那由子が入るなら』

そうして入った部活。定が部長の部活。特に何をするでもなく、ただ話をするような部活。

部長の定は、全員にそつなく会話し、そして全員の繋ぎ役になっていった。時間と共に、繋ぎ役など必要ないほどにうち解けた仲間。このまま、楽しく全てが流れていくと思った。

『徹、お母さん、暫く出張に行くから』

『分かったよ、母さん』

『那由子ちゃんのお母さんに話したらね、その間なら徹を泊めてくれるって……』

『え』

徹の母と那由子の母は、仲が良い。こちらも高校からの付き合いだが、話が合うようで、よく長電話をしていた。同時に、那由子と徹も。

『母さん、僕は一人でも……』

『駄目』

『え？』

『駄目よ。家には入らないこと』

『な、何で？』

その頃の徹は、純粹だった。悪く言うなら、鈍感。母親の異変に全く気付かない。

『ちょっとクリーニングを頼んだのよ。だから』

『そうなんだ……』

母親の言うことなら何でも信じた。那由子の言うことも何でも信じた。そして、母親と那由子が信じている者も全て信じた。

痛い目を見ても、徹は信じた。徹には、それを実行できる力があつたのだ。

その夜だつて。

『……ご、ごめん……僕、やっぱり、やっぱり、あの、ほら、えつと……庭で寝るよ!』

彼女の家にいることすらおこがましく、思わず部屋を出ようとした徹は、ズボンの裾を掴まれて踏みとどまる。

『何よ、私は気にしないよ?』

『ぼ、僕が気にするよ……』

『同じ布団で寝る訳じゃないのに……』

そういう問題じゃない。と、思いつつ、徹はベッドの脇に敷かれた自分の布団に正座する。視線を斜め下にそらして。

友達以上の関係とは言え、恋人同士ではない。

そうなのに、普通に那由子の隣に布団を敷いた彼女の母。この状況を知っている彼女の父。徹はその二人の考えが分からなかった。

『じゃあ、私は寝るよ？ 明日は学校だもんね』

『え、あ……ああ、うん』

もそもそと、何の恥ずかしげも躊躇もなく布団に潜る那由子に驚きながらも、徹も布団に入る。頭まで、すっぽりと布団にくるまって、申し訳ない気分になりながら。

『……………』

『……………』

しかし、徹は、あれほど那由子の隣で寝ていると言うことを気にかけながらも、布団に入ってから三十分後、普通に眠っていた。

夢など見た覚えもなければ、途中で目覚めた覚えもない。

朝方、携帯のアラームがなり響いた事に驚いて、慌てて伸ばした手。アラームを止め、もそ、と布団の中で丸まった時だ。寝巻きではなく、自分の肌が脇腹に触れた。

本来有り得ないことだ。

『!?!』

ばさり、と布団を捲った徹、自分の寝巻きの上着が枕元にあるのを発見し、とりあえず半裸になっていた上半身を隠す。

口は声を出さずに、訳の分からない何かを叫び、自分の布団に入っていた那由子を凝視した。

ベッドから落ちたとも見えたが、布団に入っていた意味が分からない。混乱する徹が、挙動不審に周囲を見ているその瞬間、那由子がムクリ、と起き上がり……笑った。

彼女の方は普通に服を着ている。

一先ず安心してしまったが、安心する理由が分からない。

『あ、あの……ぼ、ぼぼ、僕……』

半涙目で後退さる徹に、那由子は微笑むばかりで何も言わなかった。

そして二人は、その日から恋人同士になった。

今思えば、あの時からだったのかもしれない。あの時から、自分にはドッペルゲンガーが憑いていた。

あの記憶の無い夜から。

那由子を忘れた徹と、忘れられなかった徹。その違い。

その考えを、徹は肯定してしまった。

それを肯定することがどんな事になるか。それを徹は実感していた。

ドッペルゲンガーは知っているのだ。一番恨むべき相手が誰か。

コンコン

それは小さな音。ノックだと気付いたのは、それが聞こえて三度目。

「徹？ 私だ、定だ」

「……」

定だって？ 徹は、シーツから顔を出し、扉を凝視する。

定は至って変わらぬ様子で言う。

「入るぞ、いいか？」

「……」

シーツから抜け出て、ベッドから降りた徹の前で、鍵がガチャリと解除され、光が入る。現れたのは、当然、定だ。

三日ぶりの、しかもあんな事があつた筈なのに、彼は、全く変わった様子がない。

笑顔で手をあげる。

「久しぶり。どうした、そんな顔をして」

「さ、定」

知らず知らず、足を踏み出した徹に定は微笑む。しかし、その徹の足が止まった。理由は、あのメール。自分を疑った彼に対する、密かな脅えだった。

と、それに気が付いたのか、定が携帯を取り出す。

「徹、お前……最後まで読んだか、メール」

ピピピ、と久しぶりに聞く電子音。定は目的の送信メールを見付けて、徹に見せた。

『昨日はどこにいたんだ？ 心配したんだぞ』

心配したんだぞ。それを確認した徹は、呆けたような表情で、画面と定を見比べる。

苦笑をもらす定は、部屋の有り様を見て、溜め息を付きながら窓辺まで歩いて行って、カーテンを開く。

「さあ、空気を入れ換えようか！」

開け放たれた窓。曇りガラスの窓は、徹を映す事はない。それから、個室に備え付けてある浴槽にお湯を張り始める定を、徹は後ろから見ていた。

「ほら、風呂にでも入って、すっきりしたらどうだ？ お前、酷い顔だぞ」

鏡を割って以来、自分の顔なんて見ていない。散らばったガラス片や、テレビの画面、それを脇に寄せている定を眺めながら、徹はお湯が溜ってゆく音を聞く。水が流れる音を。

お湯が湯船を満たしたのに気が付いたのか、定が顔をあげ、浴室の蛇口を捻る。それから、浴室に散らばっていた鏡を簞で片付け、細かい破片は丁寧にシャワーで流す。

「ほら、準備出来たぞ」

「……うん」

「あ、そうだ」

入れ違いに浴室に入る徹の背に、定は言ったのだ。笑顔で。

「翼くんが今、誇彦の所に居るから……もうすぐしたら来るかもよ」

「誇彦……」

「そう。誇彦」

ぱたん、と閉められた扉。首を巡らせただけで見える浴槽。考えてみれば、この浴槽に湯を張る必要はない。シャワーで十分なはずだ。

そんな事を考えながら、頭の半分では、誇彦の事を考えていた。彼奴が生きているのか、と。

胸に広がる感情。頭を支配する思い。

「……」

湯船の湯に映る自分の姿。笑う姿に、徹は、息を飲んで……

しかし、不意にその姿が歪んだ。バシャリ、と腕の形をしたお湯が徹の頭を掴み、湯船に抱きこむ。

バシャバシャと初めの数秒なっていた、騒がしい水音は、不意に途切れる。

『これ以上、誰かを殺してしまう前に……私と同じく死のう』

暖かな水の腕に抱かれながら、徹の耳にはそれが聞こえた。確かに、あの少女の声音で。

『死のう。徹くんは……もういないの。こっちの世界の方が』

それは甘美で心地よい囁き。

『……楽しいから』

最後まで彼女の声を聞きながら、徹は抵抗を止めた。最後の最後まで体を手放さなかったのは……那由子を忘れた徹だったのだろうか。那由子を忘れなかった徹だったのだろうか。

最後まで体を手放さなかった。それが本物の徹だったのに。

しかし、もう関係ないだろう。体など、もう不必要なのだから。

そして、その後、翼に発見される彼は……とても安らかな、傷つけない、儚さを置いて、横たわっていた。人形。

人間とは思えない美しさ。彼が生きて、動いて、話している時に

は気付かなかった。

「人間は、醜いんだ。器がどれだけ美しくても」

いつの日か、定が呟いた言葉。

あの頃の徹には理解できなかった。理解するには……自分の死を見つめなければいけなかったから。

徹がこの選択をして幸せだったかどうかは……だれも知らない。

.

十・信用の代償（前書き）

誇彦先輩の言うことを信じた貴方へ。彼の思いを贈りましょう。

十・信用の代償

『こ、誇彦くん……あの、これ』

『?』

絆創膏だった。誇彦が初めて貰ったプレゼント。それは親からの愛情や、兄弟からの信頼ではなく……つい最近、同じクラスになった名も知らぬ少女からの絆創膏だった。

『さっき……プリントで指切ってたよね? まだ、血、出てるの?』

『まあ』

『じゃあ、こ、これ……使って』

『……ありがとう』

言葉の所々で、つつかかる少女に黙って視線を向けながら、誇彦は絆創膏を受取り、左中指の第二間接辺りに結び付ける。ジワリと血が滲んだ。

『あ、の……痛く無いの? そんなに血が』

『別に』

氣遣う少女。彼女の名は、歌江と言った。それを知ったのは、最悪な場面に出くわしてしまったからだが。

『うゝたえよ、うたえ』

キャハハという耳障りな笑い声。使われていない第三音楽室の扉から漏れてくるそれに、誇彦は教室内を覗きこむ。

見てみると、そこには絆創膏の少女を囲むようにして、数人の生徒が立っていた。それが女だけなら、誇彦は黙って去るつもりだったが、一人だけ男がいた。

『…………』

扉の陰に背を預け、誇彦は気配を消したまま、音楽室の声を聞く。

『マジで、あんたさあ…………ウザイよ。百合荻に何言ったのさ』

『あ、え…………な、何も』

『昨日の放課後、何してたのよ』

『あ、あれは…………絆創膏を』

『絆創膏〜?』

小学生、いや幼稚園レベルだともいながらも、誇彦は口を挟まない。女同士の喧嘩に男が口を出すと、余計ややこしくなる。

向こうの男が出張ってきたらば、こちらも出よう。

誇彦がそんな事を考えてから数分。言葉の嵐が止んだかと思うと、一人の女生徒が、男子生徒に歩み寄る。

『大人しくさせてやってよ』

『あゝあ。可哀想じゃんよ』

と言いながら、少女の腕を掴んだ彼。声なく縮こまってしまった彼女を見た誇彦は、深く溜め息を付きながら、音楽室の扉を開ける。

大袈裟な程に、ギイイ、と開いたそこに、誰もが視線を送る。そこに居たのは、左中指の第二間接に絆創膏を巻いた誇彦。

『こ、誇彦君』

じ、と睨む様に相手を見る誇彦は、傍らにあった椅子を躊躇せず

に持ち上げ、そして、投げた。的は男子生徒の腕だ。

『何すんだ、百合荻！』

『お前に百合荻と言われる筋合いはない。誰だ、お前』

襟に着いたバッヂを見て、同じクラスの人間だと気付いたが、あいにく誇彦は、自分から話しかけてこない人間には興味がなかった。ただ、投げた椅子によって、壁が凹んでないかが心配であるだけで。

『ちょ、お前、何だよ……』

歩いてくる誇彦に、彼は激しく動揺してしまっている。あの椅子がそうとう効いたらしい。

しかし、誇彦には関係がなかった。用があるのは歌江にだからだ。

『絆創膏どうも』

差し出したのは、貰ったものとは種類の違う絆創膏。柄も何もない絆創膏。

それを歌江に渡して、誇彦は踵を返した。

『おい、待てよ!』

と、男子生徒が怒りの表情で誇彦の腕を掴んだ瞬間だった。一歩で相手の懐に入った誇彦が、思いきり腹に拳を入れる。

身長は向こうの方が高く、尚且体格もいい。しかし、誇彦の一撃は相手が昏倒するほどに重たかった。

『触るな』

倒れてピクリとも動かない彼。それに、恐れ動けずに居る女生徒ら。

だが、あの絆創膏の少女は違った。

『だ、大丈夫ですか？ 確りして、下さいっ!』

揺らしていいものかどうかを悩んでいるような手付きで、彼女は男子生徒を覗きこむ。そして。

『こ、誇彦君……保健室まで……』

『何で俺が』

『この人を、こうしたのは、誇彦君だから、です』

『……』

『て、手伝って』

自分に危害を加えようとした人間にすら優しさを見せる彼女の姿に、誇彦は瞳を細めた。

『分かった』

ヒョイ、と男子生徒を持ち上げた誇彦と、複雑な表情で誇彦の後をついていった少女。

これが歌江が誇彦を気にかけて始めた最初の日。

これが誇彦が歌江に好意を持ち始めた最初の日。

そしてこの日が、初めて二人が定と会話した日。

保健室に彼はいた。怪我もしていなければ、至って健康。彼は二学年上の先輩と話していた。

『あれ、怪我かしら?』

定と話していた保健委員長の先輩は、誇彦の抱えた男子生徒をベツドに寝かせる様に指示をして、彼の看病に取り掛かる。

『……いじめられっ子ちゃんは、優しいからいじめられっ子なんだよ』

『……………』

委員長の手伝いをしている歌江には聞こえない。呟きは誇彦の耳に届き、自分をみた誇彦に、定は笑みを向けたのだ。

『部活を立ち上げたいんだが……部員にならないか？』

そのいきなりの勧誘も、その呟きも……今となってはどうでもいいのだが、誇彦は気に入らなかった。

片腕は完全に壊れた。二度と上がることのない右の肩に手を起き、
誇彦は右の肘と手を動かす。

不思議な気分だ。肩だけが動かないのが。

「先輩！」

「……翼」

もう少しくで感傷に浸るところだった。

病室の扉からひょっこりと顔を出した翼。苦笑しながら現れた定。

久しぶりに見た気がする。懐かしいと同時に、少しばかり悲しい。

あの頃には戻れない。あつたものが消えてしまったのだから。目
に見えるものも、見えないものも。

「調子は……あゝ。調子はどうですか？」

調子も何も、動かない誇彦の肩に視線を向け、翼はリテイクするようになり直した。笑顔がひきつる。

それに誇彦は特に表情を崩さず『まあまあだな』と答える。

少しばかり安堵した表情になった翼は、そこで苦笑した。が、その目からは涙が。

「……」

「私は飲み物でも買って来ようかな」

白々しく部屋を出ていく定を睨んで、誇彦はどうしたものかと翼を見やる。

笑いながら、ただ涙だけが。

「怖かったか」

「怖かった、です」

「そうか……」

台の上にあつたボックスティッシュを翼に差し出し、誇彦は少し考える。数枚のティッシュで顔を覆つた翼は、顔全体を拭く様にして涙をぬぐつた。

彼が少し赤くなつた顔で、自分を見ているのに気付いて、誇彦は言う。翼が怖いと思つていた時、自分は何を思つていたか。

「俺は……怖いと思つていなかった」

「それは……すごいじゃないですか！」

「いや俺は……何かなんでも生きようとしてた」

「先輩、強いですからね！ 先輩は冷静だったし、力もあつたし……」

違う。そうじゃない。

「違うんだ、翼」

「？」

まだ無理をしている様な表情の翼を真つ直ぐに見て、誇彦は隠さずと言つた。恐れられるのも覚悟で。

「……徹を殺してでも、生きようとしていた。いや、歌江の仇に、彼奴を殺して生き残ろうと……考えていた」

「……」

相槌も打てない様子の翼から誇彦は目をそらし、窓の外を見やる。恐ろしく晴れた空には、雲一つ無い。

それとは正反対に暗く重い静寂が部屋を満たしていた、が。

「翼くん、オレンジジュースで良かった？」

「うえっ！？ あ、ありがとうございます、先輩……」

気配もなく入り込んできた定の声音が、風のように沈黙を吹き飛ばす。胡散臭い程の笑顔が、誇彦のシャクに触る。

「はい、ブラックコーヒー」

「悪いな」

定が買ってきたのは、缶やペットボトルのものではなく、紙コップで出てくるものだ。

だが、彼が手に持っていたのは二つきり。彼自身の物がない。

「ああ、私は今から徹に会いにね」

「徹に？」

少し熱いコーヒーを少量口に含みながら、敏感に誇彦は反応を示す。

彼等は知らないのだ。自分達が同じ病院の、しかも階数違いの部屋に居ることに。

「会って何を話すんだ」

「さあ。色々。徹も今頃、一人で寂しいだろうからね」

未成年であり、精神的に不安定。それに加えて錯乱状態になると凶暴化する、という彼は、幽閉同然に過ごしているはずだ。

それを想像し、誇彦は無言でコーヒーを飲む。

「行ってきました」

「いつてらっしゃい！」

また病室から姿を消す定。沈黙がおりはじめ、誇彦は空を見上げる。と

「僕は……先輩の思ったことも一里あると思います」

「……」

「生き残るべきです。生きるべきです。……死んだ人に縛られて、生きるのをやめないで下さい」

「俺は生きる。どんな手を使っても」

「手段は選んで下さい」

今にも自分が自殺するような事を言われ、誇彦はいうが、切り返されてしまう。

両手でカップを包むように持つ翼は、ポツリと呟いた。それは徹への呟き。

「徹先輩は……手段を間違ったんです」

「そう……だな」

那由子を忘れた徹。
那由子を忘れられなかった徹。

翼はこの二人の存在を知らない。

一つになりかけの彼等。いや、二つに分裂しかけの彼等。

「俺が信じてたら、こんなことにはならなかったんだ」

「先輩、そんなことは……」

台にカップを置いて、誇彦は自嘲気味に笑う。

「死なない程度に、傷付いても、信じてやればよかったんだ」

相手から手を差し延べられるのを待つばかりで、自ら助けを求めなかった、愚かな友人。

弱い彼を信じきれなかった自分。

溢れてくる後悔に、誇彦自身が驚いていた。一つを拾いあげれば、次々と出てくる。愚かなのは誰だ。

「……彼奴が無くしたものを、軽く見ていた」

自分を悲しそうに心配そうに見る翼。誇彦は短い溜め息と共に、

視線をそらす。と、またそんなタイミングで定が帰ってきた。

例のごとく笑顔で、翼の肩を叩く。

「徹が呼んでたよ。……僕を信じてくれてありがとうだって」

「え……あ、はい」

入れかわりで出ていった翼の背を見送り、定は肩をすくめて椅子に座る。

「なんの話をしたら、翼くんがあんな顔になるんだ」

「後悔の話をした」

「……ああ、まあ……そうか」

それは重いな、と腕を組んだ定。誇彦は彼をじつと見る。

そう、定は介入してこなかった。目の前で起きた、全ての事に。

「私は、皆がやりたいようにさせただけさ。……私がやりたいように、やれる時の代償にね」

意味ありげに小さく笑う定は、常と様子が変わらない。あれだけの事がありながら、全く変わらないのだ。

それは、明らかな逸脱。笑顔が有り得ない。

「私には、私なりに思うことがあってね」

笑顔。やるせない訳でも、悲壮な訳でも、憂いている訳でもない
笑顔。

お前の思う所は何なんだ。誇彦がそう聞こうとした瞬間、俄に慌ただしくなった廊下から、息を切らした翼が部屋に駆け込んできた。

「と、と……徹、徹先輩が……あぁっ！」

「落ち着きなさい、翼くん」

「徹がなんだって？」

見てきたものと、言いたい事が頭の中でご茶混ぜになったのだろう。取り乱した様子の翼が、頭をかきむしりながら、必死に言葉を探す。外部からの声など、入ってはいないだろう。

「徹先輩が、じ……自殺」

誇彦の中で、何かが割れた。歌江の死体を見たときと同じように、割れた。

居ても立ってもいられず、ベッドから降り、知らぬ徹の病室へ走ろうと、廊下へ踏み出した瞬間……

「……な」

足から力が抜け、息が詰まった。ジワジワと胸が痛む。胸に当たった手が、ギリギリと自らに爪を立て、血を滲ませる。

だが、それとは比べ物にならない血が、廊下に広がった。

「う……あ……あがつ……かつああ」

「先輩！ 誇彦先輩！」

どこからこんなにも血が、溢れるのか。吐き出される血は、床に付いた誇彦の手を染め、駆け寄った翼の足と膝を染める。

「はあ、あ……ぐ……つ」

尋常ではない苦痛。臓腑が焼けただれているのでは無いかと言う

ほどの熱さ。

手足が勝手に動く。痙攣と言うには、少し動作が大きい。ガクガクという震え。

翼に抱き起こされ、定を睨む。血で染まった唇で綴った言葉は、直も溢れる血の水音に阻まれ音を成さない。

最後まで見開いた瞳に映るもの。それは歩み寄る定の足元と、しやがみこんだ時に丁度見えた……歪んだ月のような笑顔だった。

悲しくも、これが誇彦が信じた故の代償。彼は死なない程度に信じる事が出来たのだろうか……。

.

十一 ・ 彼の願望（前書き）

定先輩の言葉を受けいれた貴方に。彼の真実を贈りましょう。

十一・彼の願望

破壊因子が欲しかった。ただそれだけ。

定にとって、阿莉奈の入部にはそれ以外の理由はなかった。

彼女の存在で、端からドミノを崩していける。これは自分の命すらかけた実験。

そしてそれは……見事に成功したのだ。

「……」

「翼くん。帰ろう。私達がすることはもうない」

「……」

徹が死んだ直後の、誇彦の異常。

集中治療室で何とか生きている状態の誇彦の為に、翼と定は病院に一夜だけ泊まった。誇彦が目を醒ますことなど、当然なかったが。

朝日が登り、人々が活動し始める時間になった頃、定は翼に言った。彼は答えない。

「ほら。気になるなら、また来ればいい。生きている限り、また会

えるんだから」

「……………はい」

ふら、と力なく立ち上がった翼を支えるように、定は肩に手を置く。衰弱したような目をして、ぼんやりと歩く翼は、何を考えているのやら。

でも関係ないか、何を考えていても。と、定は笑みをもらす。

階段を降って、待ち人の多いロビーを通り、穏やかな前庭を通る。大通りに出ると、翼の表情も少しはマシになった。

「……………ふう。疲れたねえ、翼くん」

「はい」

無理した様子もなく、さも当然のように笑う定に、翼は疲れた笑みを返すしかできない。

「君は……………どう思う?」

「え?」

「名鷹を、どう思う?」

何ですか、突然。

と、思いはしたものの、翼は口には出さなかった。身体的にも精神的にも疲れきっていて、会話すら面倒に思えてならない。

出来うる限りの思考を駆使し、定の問いに答えようと思ったのだが、特に何の意見も出てこなかった。

「普通の子だったと思いますよ」

「そうか……それは、よかった」

微笑んだ定と目が合った瞬間、どこかでパチンツと音がした。何かと何かが、上手い具合いにはまり合ったかのような音。

聞き覚えがあるようで無い音は、直ぐに翼の頭から消える。

後は黙々と歩く翼に、ずっと定が語りかけている状態だった。

「さっきの質問は、結構重要だったんだが……。名鷹はアレでいて役者でね。それに優秀だ。既に人生で習得する八割型の知識は身に付けているだろう」

弟自慢か……と思ったが、そんな事はなかった。

彼は次に言ったのだ。

「もし、もし君がこの先、生き残るような事があつたら……弟に気を付けるといい。痛い目を見るよ……こんな風に」

「？」

何が起こつたのか。ヒュツと風が切れる音を聞き、翼は『え？』と、目の前の光景を疑った。

につこり笑つた定が、とても軽い動作で、歩道と車道を別つ柵を乗り越えたのだ。そして、枯れ葉のように降りた車道で、彼は、彼は、彼は。

「……これで母さんは君に優しくなるね。名鷹」

けたたましく鳴り響いたクラクション。地面を揺らすような振動。轟音。

微笑みを浮かべた彼が待っていたのは、大型のトラック。

先輩！ と、手を伸ばしても届くはずなどなく、今更ブレーキを踏んでも、ハンドルを切っても避けられる訳なく。

その瞬間、血しぶきが視界を染めた。

「キヤアアアアッ!？」

その女性は、トラックに跳ねられ、何メートルも先で息絶えた定に驚愕したのか。それとも目の前で、首から噴き出した血を、呆然と手で抑え込んだ翼を恐れたのが。

一步、二歩、と折れそうな膝で後退さつた翼は、何かの壁に背をぶつけて、ズルズルと脱力する。

誰か親切な人が、ハンカチやら何やらで翼の首の血を止め、何かを叫びかけてくる。だが、翼は答えることなどなく、ただもう一つの人だかりの中心で沈黙しているであろう定を見ていた。

ああ、どうしてこんな事を。どうしてこんな事に。彼は何がしたくて、何を伝えたかったのだろうか。あの笑みは、一体何のために向けられたものだったのだろうか。それに、最期の言葉の意味は……？

薄れて行く意識は、首の熱を持つ激しい痛みすら覆い隠し、翼を導く。その道がどこに続くのか、翼は知らない。

定の道がどちらに続いたのかも、誰にも分からない。未来は、定の望み通りに進んでいくのだろうか……。

まず始めに。それは私の中に芽生えた、一つの感情による実験だった。

私は、それを破壊したいと思ったのだ。

それ、とは、美しきもの。優しきもの。暖かきもの。

人々が善とするものだ。

初めに何をやったか……ああ、瓶を割った。美しく深い青に輝く瓶を割って、泥の中に混ぜて埋めた。泥まみれのそれは、全く美しくなどなかった。

次に、近所の優しいお姉さん。彼女に真実を教えた。本当は貴方はあの家の娘じゃない。いいや違う。本当は、父親は違う人なんだ

よ、と。

お姉さんは笑っていた。

だから言った。お母さんも違う人だと。複雑な家の子だと思った。

人の旦那と不倫した母親。しかし、本当の母親と、本当の父親が死んだ後、とんだ事が起こった。不倫された夫と妻。その二人が再婚。自分達を裏切った者らの間に産まれた子を、今まで育てて来たのだよ、と。

最初は笑っていた。お姉さんは笑っていた。

だが、日を追うごとに、それは緩やかに壊れてゆく。両親の態度、対応。今まで気にしなかった、気にする必要のない些細な事まで気にかけ始めた彼女は、それから数日後に壊れた。

優しさの欠片もない……無口な人形。ふらりと家を出ては、誰かに連れ戻される毎日。眺めていて、面白かった。

だが、そんなある日だ。私にも衝撃的な事件が起こったのか。母が再婚するらしい。

男を見る目などある訳無い母は、暴力的な男と共に生きる事を誓った。私は彼女の意思にしたがった。

そして、弟が産まれた時……私は変わった。弟が泣いて、私の指を掴むから、私は指先を動かしながらも、黙って掴まれてやる。可愛らしい子だった。

こんな狭い貸屋でなくとも、もう少しいい家に住まえばいいのに。

弟が産まれた三年後、妹が産まれ、私は学業と育児に終われる毎日。父親は遊び歩くし、母は仕事がある。

他とは違えども、充実した日々を……送っていたのだ。あの日までは。

それは私が中学二年で、弟が小学三年生。妹が五歳の時だった。

『やめて下さい！ 美希は何も悪くないじゃないですか！』

母が帰ってこず、寂しがりな妹がぐずりはじめた。それが、機嫌の悪かった父親の勘に触ったのだらう。彼は、いきなり妹に拳を振り上げた。五歳の妹に。

当然、私がかばう事になる。

妹を弟に任せ、私は父親と対峙した。初めてだった。こうして喧嘩するのは。

『父親のすることに、口出すんじゃないよ、連れ子が！』

父親だと思った事は無かった。ただ、名前を知らないから、父親と呼んでいただけ。

掴みかかれて、私は逆に殴りかえず。久しぶりに……あの感覚が戻る。破壊衝動。

この暖かいモノが冷たくなったら……想像するだけで笑みが。酒と煙草で弱った体に、私が負ける訳はなく、かかつて来るたびに、カウンターの様に、容赦の無い攻撃を浴びせる。いや、浴びせていた。

『お兄ちゃああんっ』

『あっ、美希!』

愛しい妹の声と、飛込んできた彼女の衝撃。彼女を自分から引き剥がし、隣の部屋から慌ててかけてきた弟に突き飛ばした瞬間、部屋の棚に、私は叩き付けられた。

私は妹が大事で、父親はそうでない。それだけの話だ。

私の胸ぐらを掴んだ父親の右手。

父親から見れば左。私から見れば右。

ざくり……

と音がして、私は引きつる様に息を吸い込んだ。

「……………うああああっ!」

叫んだ。薬指を切断しようかという傷は、今までに感じたことのない痛みを呼んだ。

皮膚を裂き、肉を斬り、骨すら破った硝子片。次に私の太股を刺し、次に足を切り裂き、肩を突き刺して終わる。肩には破片を刺したまま……奴は家を出ていった。

私は血まみれで、決して弟と妹は近寄せなかった。ガラス片が刺さってしまう。

その直後か。母が帰宅したのは。帰宅した途端、彼女は、悲鳴をあげ、救急車を呼んだ。そして……私が退院する日に、彼女は、弟と妹を捨てた。

それから日を重ねるたび、私は思い知らされた。母はあることに気付いてしまったのだと。

彼女は、それに気付いたからこそ、弟と妹を、あの地獄に置いてきた。

『私には、貴方がいればいいのよ』

そう。彼女には、常に側にいてくれる『一人』がればいい。それは、私でなくとも、誰でも。

私がいなくなったら、また他の誰かと共に暮らすのだろう。だが

どうでもよかった。母が他の誰かと暮らす時、私はそこにいないのだから。

それから、私の傷も右の薬指以外は、完全に癒えた頃、私はどうしても気になって、弟と妹に会いに行った。

つい最近。私が高校二年で、弟が小学五年、妹が小学二年。

今更会わせる顔もないが、行ってみたのだ。あの貸屋へ。

『あ、お兄ちゃん！　ねえ、見てみて！』

久しぶりに見た弟の膝や顔は、白っぽい粉がついていた。久しぶりに触れた弟の掌は、赤くベタついていた。

久しぶりに見た妹の顔は白い粉にまみれ、青白かった。久しぶりに触れた妹は、グニヤリとしていて、冷たかった。

『ほらあ、凄いでしょ？』

久しぶりに見た父親は……とても芸術的に、体のパーツに切り分けられていた。

手足に首、胴体は、解剖実験の様に薄皮一枚一枚を剥がしたかのように、みごとに開かれていた。

当然、心臓は動いていない。

『ね？ 上手でしょ』

『ああ、そうだね……でも』

と、私は父親だった者の臓器を、素手で掻き混ぜた。肋は折られて、障害物はない。

ブチブチと響いた音に息を飲み、グチャグチャになった中身に笑う。

『兄さんは、こっちの方が好きだな』

『えー、変なの！』

その会話が成立した時点で、弟は私と同類だと言うことになった。全てを隠し、家に連れてきたものの、母は弟を邪魔者と勘違いしてしまった。

これはいけない、と考えたとき、私は思ったのだ。今までの私と母の関係こそが暖かいのだと。私は暖かさなどいらない。

だがだからといって母を排除しては、弟が暮らしていくのに苦労する。だから。否、だったら、私が消えよう、と思った。

疲れるだけの、嫌いなものだらけの人生を生きるよりかは、最後に好きな事をやって死ぬ方がいい。

私はそう思った。

だから、部のメンバーを実験に使おうと思ったのだ。

儂くも壊れやすい友情。ひた隠される愛憎。最強と最弱。知恵と力。正と歪。

不思議と揃った条件は、あたかも私の為に用意されたようであつた。……

『ああ、誰にも聞かれない話があるなら、向こうに行くといい』

『え？ 何よ、定』

『……那由子と話をするんじゃないのかい？』

『！』

足場が緩くて、尚且視界の悪い場所をあえて進めた。ただ誤算だったのは、阿莉奈が自らで足を滑らせていた事だ。

『でも……あっち滑って危ないじゃん？』

『そうか？ でも、あそこは最適だぞ。何をするにも』

それから、彼女が那由子連れて向こうへ行つたのを見た。

あの場所で阿莉奈が那由子を押したかどうかは分からない。分からないが……押していたとしても、私は驚かないだろう。

阿莉奈は出来るだろうし、那由子には押される理由がある。

可哀想に。私に関わらなければ、巻き込まれなかったものを。

可哀想に。私が孤独を恐れさえしなければ、私の死に胸を痛めるだけですんだらうに。

可哀想に。生き残ろうとも、弟がいる限り、また巻き込まれてしまふのだらう。

ああ。私が消えてから、一体誰がこれを見るのだらう。誰が、生き残っただらう。それだけが、心残りだ。

私と共に死ななかった者、生き残った君に、私の真実を語ろう。これが私の真実。

決して見せることの無かった、私の……

.

終りに…

そこはカビ臭い、簡素な鉄の本棚が立ち並ぶ場所。首にデザインの光る布を巻いた青年が、比較的新しい資料を読んでいた。

と、重い扉が開く音がして、カツカツと足音が近付いてくる。

「また読んでものか、翼」

「……」

現れたのは、スラリとした長身の青年。冷めた目には、その歳には不相应な微妙な疲れが見える。

「お前の父親が呼んでる。……つい先日捕まえたあの少年についてだそうだ」

「……」

「ああ。似ている、では済まなくなったようだぞ」

青年の言葉に頷き、パクパクと口を動かすだけの翼。彼は、生きる代わりに、声を失った。

相方は、右肩を。

翼と誇彦。二人は生き残り、そして翼の父親のもと、刑事として職についていた。

翼の父親の後ろだてがあるせいか、はたまた業績がいいからか、署内ではかなり有名な二人は、つい先日、ある事件に関わった。と言っても、その時、翼はこちらに残り、情報の処理をしていたのだが。

その事件とは、二人の少年同士の喧嘩、という枠にはおさまらない、死傷事件だった。家出人とされていた少女が殺されており、少女と同居していた少年は瀕死。

そして、犯人の少年は……。

「拘置所だそうだ。行けそうか？」

拘置所までの道のりを記した紙切れを翼に渡しながら、誇彦は問う。問われた翼は、開いていた資料を棚に戻して、笑顔で頷いた。

翼が見ていた資料。それは定が残した、独白じみた遺書だった。

彼の妹の死んだ場所に放置されていた、くまの人形。それが持つ封筒の中に入っていたディスク。その中身を印刷したものが、この資料。

資料には、これから会いに行く少年が、いかに危険であり、同時に定自身が危険であつたかが書かれていた。

なにせよ、それを読み返したところで、今更何もできないが。

「運転はまかせた」

「……」

駐車を歩きながら車のキーを翼に放って、誇彦は欠伸をする。

当時からスーパーボーイと呼ばれていた彼は、今や万能と呼ばれても過言ではない能力を身に付けた。本人に面と向かって聞いてはいないが、ここ最近で、否定していた霊的生命体との遭遇まで果たしたらしい。

翼には全く分らないが。

運転席に乗り込んだ翼の隣で、助手席の椅子を倒した誇彦はシートベルトは着けずに横になる。

軽く困ったような表情になりながらもエンジンをかけた翼は、比較的安全運転を心掛けてアクセルを踏み込んだ。制限速度は破るためにあるのだと思う。

ガラス越しに対面した少年は、にっこりと笑った。

数分前に別室で、翼の父親に渡された資料を眺めながら、誇彦は横目で翼を見やる。彼は、ただ少年にみいつていた。

春日野 名鷹。長い白髪に、常人のそれではない目の光。そして……兄に、定に似ていた。

「久しぶり、お兄ちゃん？」

少々馬鹿にするような笑みを含んだ声音だが、翼は動じることなく、むしろ笑顔を返した。それも純粹無垢な笑顔を。

「久しぶり、だそうだ」

「あ？ あんた、通訳さん？ 翼お兄ちゃんは喋んねーの？」

お兄ちゃん、と言う響きがここまで似合わない人間も珍しいな、
と思いながらも、誇彦は名鷹を一別し、首を左右に振った。

「俺は誇彦。こいつの相方だ」

「へー。……ああ！ 兄貴が邪魔がってた人ね。分かった分かった。
凄い人だ」

「……」

けらけら笑って、彼が動くたびに、ジャラジャラと音が響く。初
めは何だろうな、と思っていた。しかし、それは直ぐに明らかにな
る。

「凄いつて……あんた、どんくらい凄い？ 俺より凄いのかよ」

「……」

名鷹の言葉を聞いた翼が、小さく笑いながら、口を動かした。そ
れを見た誇彦は表情をしかめ、名鷹は肩をすくめて口笛を吹く。

「格からして違つて？ 言ってくれんじゃん」

悪戯っぽく笑う名鷹だったが、翼ははっとした表情で彼を見て、

誇彦は目を細めた。

さも当然のように、翼に答えた名鷹だが、人の口元のみで言葉が理解できる者は少ない。普通はできないはずだ。

「何でそんな顔するんですか。普通じゃん、これくらい」

なんて言いながら、テーブルに上げられた彼の手首には、何重もの手錠が。腕に至っては特殊なテープで巻かれる程の嚴重ぶりだ。

しかし、手錠は鎖が切れてしまった物も混ざっており、その耐久性が気にかかる。まるで、手錠をされたまま、何年も放置されたようなありさまになっていた。

見せ付けるかのような、彼の力。

『痛い目を見るよ……』

翼の頭に、あの日、そんなことを言われたな、という思いが浮かんで消える。

定は気を付けろ、と言う言葉を残した。

しかし気を付けるも何も、彼は、捕まってそしてここにいる。

だが、名鷹は、言ったのだ。制限時間がくる直前に。

「ちょっと遊ばねえ、お兄ちゃん達」

余裕の見える笑み。遊ぶ時間はない、と言おうとした誇彦を、翼が制する。

翼は黙って彼を見ていた。

名鷹が言う遊びが、普通でない事を知りながら、それでも翼は聞いた。聞かねば、始まらない気がしたから。聞かねば、知らぬ内に始まり、終わっている気がしたから。

そして名鷹は、『ありがとね』と笑ってから言った。

「俺にはさ、ぶっ壊したい物があるんだよ。それを賭けたゲームをしよう」

面白そうだろ？ と笑う名鷹。彼は、分かっているだろうか。自分がどんな状況に置かれているのか。これからどうなるのか。

しかし名鷹は、そんな心配をあざ笑うかのように続ける。

「俺が壊したいのは人。ある一人の人間。すぐ分かるって。……んで、それを見事守りきれたら、そっちの勝ち。俺が壊しちゃったら俺の勝ち」

きしし、と笑う名鷹。

条件はあれど、賞金はないゲーム。いや、賞金は『壊したいものの命か。』

「あの時のゲームは結果的に負けちまったけど、今度は勝つよ」

あの時のゲームとは、定が立てた計画のことだろうか。

ガラスを隔てた壁の向こうで、扉が開き、職員が名鷹にアイマス
クを着けた。やりすぎではないか、と思いましたが、名鷹はひょう
ひょうとしたまま、確りと立ち上がった。そして去り行く彼の背に、
誇彦が尋ねる。

「あの時のゲーム……お前はもうなると思っていたんだ？」

ぴた、と歩みを止めた名鷹。

「俺は……」

その当時を思い出す分だけの間を置いて、彼は言った。背中しか
見えねども、表情が分かるようなこわねで。

「俺は……全員が死んでると思ってたよ」

そして、扉は閉まった。

それから数時間後、一人の少年が拘置所から姿を消した。警察署からトンボ返しに戻ってきた誇彦と翼は、改めて彼の危険性を認識した。

定の弟。母親から継いだであろう禁断の思考。父親譲りの腕力。そして、彼自身が培ってきた能力。

「……」

「格が違う、か」

どっちがどう違うのだろう。次々に運び出されて行く職員らと、血化粧で染まった施設内を一眸し、誇彦は呟いた。

その時、翼は一瞬考えてしまったのだ。もし、この先彼を再度捕まえたとしても……彼を束縛しておくことは出来ないのではないかと。

蘇るのは、あの日の定の言葉ばかり。

でもやはり、全てが遅かったのだ。

やがて、赤コートの死神、と呼ばれる様になる殺人鬼は、こうして野に放たれた。そしてそれは同時に、二人の死神狩りが誕生した日でもある。

ゲーム上のイベントの様に行われる犯行に、二人は立ち向かう。

死神が真に狙う者を守る為の、警察容認の特別執行官。二人に与えられた新たな肩書きは、たった一人の少年の為だけにつけられた。

鳶、と言う名の、死神とは正反対の、華奢な少年の為に。

これが長い始まりの終わり。

僕が関わってしまった、異常な物語の始まり。

そして始まりの物語の結末を狂わせた僕の名を、最後に書いておこうと思う。

僕が居なければ、とめる者がいなければ、多分、本当に全員が死んでいたと思うから……。

介入者

片岡 翼

生き残り

百合菰 誇彦

僕らの話は終わった。でも、僕と誇彦先輩の物語は漸く始まったばかり……

物語は、続いて行く。

終りに…（後書き）

お疲れ様でした。貴方には壊してしまいたい物語がありましたか？
知りたくなかった真実がありましたでしょうか……。しかし
残念ながら、それが現実なのです。それでは、また。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6190b/>

絆2 ～因縁編～

2010年11月20日15時15分発行